

くんずほぐれつ

蟹のふんどし

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

鬼殺隊をやめたい男が鬼とくんずほぐれつ（意識）する物語。

目次

鬼殺隊はクズばかり	1
師匠、継子にしてください	21
休みぐらい静かに過ごそうぜ	26
私、とても迷惑しているんですよ？	42
金持ち兄妹は良く分からない	49
あいつマジ許さんからな(序)	64
あいつマジ許さんからな(破)	79
あいつマジ許さんからな(急)	88

鬼殺隊はクズばかり

「静代……静代……」

二十代後半であろう男はその目に影を落とし、ベッドの上で何度も名前を呼ぶ。

「清さん。一体何があつたんですか？」

警察服を着た男はそのベッド横に座り、うなだれる男に優しく問いかけた。

だが男は何も聞こえなかったかのようにただうなだれている。

「ああ、俺はどうすればよかつたんだ……」

そう繰り返すだけの男にしびれを切らしたのか警官の隣に立っていた初老の女性は怒鳴り声を上げる。

「清！いい加減にしなさい！何があつたか聞いてるのよ！他人様の手を煩わせるんじゃないやありません！」

頬を張ろうと上がった右手を警官が焦って止める。

「お母様、落ち着いてください」

「ですが……」

「清さんも動揺しているのです。無理に聞こうとしても余計に混乱してしまいますよ」

母親らしき女性は渋々手を下した。

「ああ、静代……静代……」

……こりゃあ、ダメだな。

有用な情報は何一つ聞きだせそうにない。

二人の後ろで見ていた俺は組んでいた腕を下し、荷物を取った。そして警官に声をかけた。

「帰りましょう。彼はまだ混乱しているようだ。話をできる状態ではない」

「よろしいのですか？」

「ええ。得られるものはありました」

そして母親に一礼した。

「無理を聞いてくださり、ありがとうございます」

母親は慌てて俺に頭を下げた。

「いえーそんな！むしろ何もお力添えできず申し訳なくて……」

「そんなことはありませんよ。これは少しばかりのお礼です」

俺は懐から少々厚い封筒を取り出し、差し出した。

母親は慌てて首を振る。

「上がりきった口角は隠しきれていない。」

「こんな受け取れません！」

「入院というものは何かと入用です。お使いください」

「……………それでは……」

母親は渋々といった体でその封筒を受け取った。

それでいい。口止め料は今後の投資だ。

あんたは金を、俺は安全を得る。

「それではお母様もご自愛ください」

一礼して俺は病室を出た。

困ったな。まともに話を聞けそうな場所はここで最後だったんだが。

§

雷久保鳴海様

拝啓

春たけなわの頃となり、雷久保様におかれましてはますますのご隆盛のことと存じます。

さて、本年も柱合会議の季節となりました。雷久保様が定例会議に参加されるおつもりがないのは存じておりますが、現場を深く知るものとして、そして多くの人を助けたものとして、誇りを胸に参加され

ることを切に願っております。議題は別紙を参照していただければと思います。

また、先日は藤の花を送付して頂きありがとうございます。こちらの在庫が切れていたので大変助かりました。追加で送って頂いたお花も大層綺麗で、蝶屋敷にも明るい香りが漂っております。

私の誕生日にお送りになったのはわざとですか。ほんと、そういうところですよ。

それでは、またお会いできる日を楽しみにしております。

まだまだ肌寒い日もありますので、ご自愛ください。

敬具

胡蝶しのぶ

俺は達筆な字の並ぶ手紙から視線を上げた。

「……………」

そーいや、そーうか。

そろそろ定例会議が開かれる時期か。

二枚目の手紙には定例会議の議題と進行予定、出席予定者が書かれている。

論議的は実力の二極化が進む鬼殺隊の是正と強化。

それから全国の鬼の変動。

「……………行かねえな」

後者はいつもの現状報告。

現在のどこにどれほどの鬼がいるか、もしくははいたか。

鬼の分布を確認して、逆算的に鬼舞辻の足跡を読む。

そして全国に適切な戦力を配分する。

これはいつもしているように鎧烏に報告書を届けさせればいい。

急激な変化が見られなければ書面で充分だろう。

問題は前者。

確かに最近の鬼殺隊は精鋭と呼べる実力者とすぐに折れる新参者

の2極化が進んでいる。

中堅に位置するものが少ないから新米を教導するものが少ない。そのせいで新人は成長できず、逆に精鋭は仕事量が極端に増えている。

現にそのとぼつちりを俺もくらっている。

最近仕事が多すぎる。

やってもやっても鬼が湧いてきやがる。

なんだ、あいつらは。ゴキブリか何かか？

まあ、今の俺みたいに他人事にとらえている奴らが多すぎるから、組織が歪な形に変化しつつあると考えれば自業自得ともいえる。

だがそれがどうした。そんなことは知らん。

俺は鬼殺隊を辞める身だ。

退職する職場の新人研修なんかやってられるか。

こんなクソな組織の運営なんて絶対やらねえ。

「にしても錚々たるメンツだ。なんだこいつら？ 暇か？」

出席者の名簿を確認したため息をついた。

あのでかすぎる岩柱を筆頭として、ゴリラ忍者の音柱。イキり真面目の風柱。

ネチネチ蛇柱、オールポジティブ炎柱。目の笑っていない蟲柱に、煽りの水柱。

起きてんのか寝てんのか分からん霞柱と、もはや訳の分からない恋柱。

…ほぼ全員出席してんじやん。

「この暇人どもめ！」

ムカついて名簿を叩いた。

時間あるなら俺の仕事やってくれねえかな。

「お前ノ仕事ガ遅いダケ！」

俺の肩からやかましい声が響く。

「うるせえーんなことは分かってんだよー！」

肩にのる俺担当の鏝鳥に怒鳴る。

だからムカついているのだ。

どいつもこいつも優秀な人間だよ！
クソが！くたばれ！

名簿をくしゃくしゃに丸めて投げ捨てようと思ったが、鳥は頭をつついてきた。

地味に痛い。

「言われなくてもするよ、仕事だろ？」

「違うゾ！もう一通！」

「あ？」

確認すると鳥の足にもう一つ手紙が巻いてあった。

なんだ？

巻いてある手紙をほどき、広げる。

師匠様

前略

継子にしてください。

近いうちにまたご連絡いたします。

草々

真菰

「……………マジか、こいつ。しつこい。それにしつこい」

あとしつこい。

なんだこりや。

これを送って弟子になれるとか本気で思ってたのか？

思っているとしたらあまりにも馬鹿だ。

思っていないなら失礼すぎて馬鹿だ。

「というか師匠様ってなんだよ。敬称に敬称つけてどうすんだ。俺は天皇かなにかか？」

俺はとんちきな手紙を鼻で笑い、荷物から手紙と万年筆を取り出した。

全略

俺は手紙のど真ん中にその二文字だけを書き込んだ。

アホすぎる手紙の差出人にはアホな返事がちようどいい。

そして鳥の足に巻き付けた。

「仕事を増やして悪いが、これを先に送ってくれ」

もちろん毛ほども悪いとは思っていない。

鳥は俺の頼みを聞くと胡蝶からの手紙を見た。

ああ、こつちね。

「こつちは近況報告を提出するからあとで書く」

「会議二出るヨ」

「やだよ」

あれだけ優秀な人間が集まっているのに俺いらないだろ。

お飾りで出席する会議とか嫌すぎる。

俺なら始まった瞬間に寝るか帰る。

「現状報告書は書くんだからそれでいいだろ」

能力差のある人間を無理矢理並べても誰の得にもならない。

会議は滞り、出席者はイライラし、俺もムカつく。

Win-winならぬ Lose-loseだ。

形式守った挙句にみんなが不幸になって何の意味があるのか。

俺はないと思うね。

その時間に甘味を嗜むか、女を抱いていたほうがよほど意味がある。

みんな幸せ。

「この給料泥棒メ」

「鬼殺隊のパフォーマンスを上げるための仕事は全部する。俺ができる範囲でな」

鳥がまた頭をつついてきた。

「精神的二向上心のないものハ馬鹿ダ！」

「痛いからやめろ」

自分の出来る仕事をミスなく仕上げるのが賢い人間だ。

できないことを安請け合ひして、どうしようもなくなってから投げ

出す方が圧倒的に馬鹿だ。

「というかそれ、最近新聞で連載してる小説の台詞だろ」

鳥がわずかに目を見開く。

「お前、手紙を送る途中で寄り道してるな？喫茶店とかで新聞読んでる人間のそばに行つて…」

「承ツタゾ！行ツテクル！」

「あ、てめえ！ま…」

俺の制止を振り切つて鳥は飛び去つた。

あの野郎……。

休憩も嗜好品も充分量与えているというのに。

「つたく。……まあ、真面目過ぎるやつよりはましか」

それでこそ俺の担当。

「そっぴや胡蝶の誕生日つてあの日だったのか」

報告書に藤の花の毒の受注処理が大量にあったから、適当に見繕つて送つただけだったんだが。

というか、そういうところつてどういうところだよ。

……ああ、はいはい。

「誕生日に毒送つてんじゃねえよ、喧嘩売つてんのか」
つて言いたいよね。

喧嘩売つてんだよ。分かれ。

「まあいつか」

§

大通りにはバスが走り、多くの人が行きかっていた。

行きかう人の服装は和装洋装入り混じり、みな忙しそうだが澁刺として顔を上げ歩いている。

希望を持った目をしている奴らばかりだ。

「景気いいねえ」

俺は隊服を脱ぎ、背広姿で歩きながらあたりを見回した。信じられるか？これでこの国、戦争やってんだぜ。

そうとは思えない賑わいだ。

数年前、欧州のある国の皇太子が暗殺された。

何年もため込んだ諸国間のフラストラーションはそれを皮切りに大爆発を起こし、欧州諸国は戦争に突入した。

そして我が国、大日本帝国は英国と同盟を結んでいたため、英国の陣営として参戦を余儀なくされたった。

これだけ聞くとはた迷惑な話だ。

実際、欧州諸国が世界の市場を占有していたことも相まって、為替市場は混乱、工業原料は入手困難、数年前は恐慌状態になりかけた。

そっちの問題はそっちで片付けてくれ。

と、そう言いたいところだがこっちにも旨みはあった。

戦争をやってる国は戦うことに手いっぱい、自国の産業を成長させることにまで手が回らない。

すると必然的に軍需品は不足する。

さて、足りなくなつた武器、燃料、衣類、食料はどこから調達してくるでしょうか？

当然、それがあるところ。

具体的には戦場から離れていて安全に産業の運営が可能かつ、味方をしてくれて、さらにはそれなりの工業生産力を持つ先進国だ。

そんな都合の良い国なんてどこにあんだよ……あるじゃん！ジャパン！

とそんな流れで我が国は英国や露西亜に対して大量の軍需品を供給！

アジア、アフリカ市場から戦争で忙しい欧米諸国が後退したため、日本が市場を独占！

輸出商品が売れる！売れる！

どこへ行っても「日本さん、商品売ってくださいよ」状態。

もう景気が良くなるのも当然。

対岸の火事なら見てるだけだったが、対岸で戦争が起ころと向こう

岸は地獄だがこちらは天国だ。

人が殺し合うと人が榮えるなんて、何という皮肉。

行きかう人々の希望は向こう岸の絶望によって作られているんだよ。

そんなクソみたいな目で人を眺めた。

まあ、これだけ景気がいいとその反動も相当だろう。

精々今のうちに楽しんでおくといいさ。俺も人の心配をしている場合じゃないし。

いやあ、それにしてもまつとうな姿でまつとうな時間帯にまつとうな場所にいると何だか俺がまつとうな人間に思えてくるな。

「さて……こつちか」

そんなことを考えながら俺は賑やかな街並みをしばらく歩き、人混みが閑散としてきたところで一つ、洋風のモダンな屋敷を見つけた。

「あれか……」

周りの建築物は古式ゆかしい和式であるのに、あそこだけが自分は違おうと主張するような

洋式建築である。

率直に言って趣味が悪い。

偉そうなやつは嫌いだ。

といってもこれから俺も偉そうな奴にならなきゃいけないんだが。

大きな扉の前に立つ。

そしてライオンを模したドアノッカーで扉を二回ほど叩いた。

「……………」

ライオンとは洒落てんな。

成金め。

しばらくするとゆっくりと扉が開き、洋装をした初老の男性が顔を出した。

「当家に何か御用でしょうか？」

俺は一礼し、要を告げた。

「私、内務省警保局保安課の雷久保鳴海と申します。内木様と正午に面会のお約束をさせていただいているのですが」

格式ばった口調。

いくら俺がクズだとしてもTPOは弁えている。

男性は鋭い目つきでこちらを見た後、うやうやしく頭を下げた。

「……失礼いたしました。雷久保様、どうぞこちらにお入りください」
そんなに睨まなくてもいいよ。

別にあんたらを摘発しに来たわけじゃない。

というか法を執行できるような権限を持っていない。

なんなら官僚ですらない。

長い廊下を歩き、ある客間に通された。

「こちらでお座りになって少々お待ちください。すぐに当家の主を呼んで参ります。何か御用がお有りの際は呼んでいただければすぐに参上いたします。では」

一礼してモダンな扉を閉めた。

勝手にうろつくくんじゃねえとくぎを刺されてしまった。

政府の犬に自分の家をウロチョロされたら鬱陶しいだろうがそこは安心してくれ。

俺は政府の犬じゃない。

俺は座らずに部屋を見歩く。

滑らかな手触りの椅子。鉦石を加工して作られたのであろう机。彫刻の施された額縁に入れてある写真、漆塗りされた木製時計。

全部が全部、俺の1年分の給料は軽く跳んでいきそうな家財である。

成金の家やばいな。

信用とはかくも恐ろしいほどに高いのか。

召使が持ってきた茶をずるずると飲んでいたら、1分もたたないうちに当主とやらが部屋に入ってきた。

官僚の看板は伊達じゃない。

こんなに早く出迎えられたのは、鬼殺隊の任務が何百とあれど数えるほどしかない。

はて、誰だったか。西洋の哲学者が言っていたな。

人間は権威や伝統を無批判に信じ込むから偏見を作り出すとか。

彼はこれを「劇場のイドラ」と呼んで批判していたが、権威を持つ立場になると実に気分がいい。

こうやって権力者は力に溺れていくんだろな。くたばれ。

入ってきた成金当主は俺が思っていたのとは少し違った。

スマートな体系に、短くまとめられた整髪、張りのある肌、鋭い目つき、整った顔。

大海に覇をとどろかす大商人と呼ばれて疑わないくらいには力強い雰囲気を漂わせている。

偉そうにひげを伸ばしたデブが出てくるもんだと思ったんだが、紳士が出てきちゃったよ。

俺は一目でこいつが嫌いになった。

金を持つてくるくせにイケメンとか心底むかつくわ。

「お待たせして申し訳ない、私は内木汽船の内木信成と申します」

あちらが右手を出してきたのでこちらも差し出す。

「内務省警保局保安課の雷久保鳴海と申します。急な面会を受け入れてくださりありがとうございます」

軽い握手を交わす。

「とんでもない。お国に尽くす官僚方のお力になれるならどんな労力も惜しみませんとも」

内木は笑顔でそう言い切って見せた。

おいおい、この男やべえぞ。

一円の得にもならない訪問に一切顔色を変えずに媚を売って見せるとか計算高すぎる。

ちよつとまともではない。

実際、この男、本当にまともではない。

この男、なんと資本金2万足らずで億万長者になりあがった本物の成金だからだ。

欧米諸国間のいざこざで始まったさききの戦争。

日本は欧米に支援することになったが、戦力と軍需品の供給先は広大なユーラシア大陸を挟んで向こう側。

もちろん遠大な距離を陸路で行く馬鹿はいない。海路で行く以外の選択肢はない。

だが軍は膨大な支援が可能なほどの舟を持っていない。さてどうする？

これも同じだ。あるところからもってくる。

ということでは民間の船舶は軍用として軍部が徴用してしまった。すると困るのはもちろん輸出会社。

自国の商品があり、アジア、アフリカの大きな市場は欧州が抜けてから空き状態。

類を見ないほどの大チャンス。またとない儲けの機会！
だけど船がねえ！

持っていけば売れるのに！宝の山が目の前にあるのに！
持っていけねえ！ちくしょう！

誰か船を貸してくれ！いつもの3倍、いや5倍払う！

「いいだろう貸してやる。ただし10倍だな」

これを言ったのが目前にいる内木だ。

運送という手段の需要が高騰していることに目をつけた内木は残ったチャーター船一隻で汽船会社を起こし、平時の10倍以上の値段で商品を運ぶことで大量の利益を得た。

その利益でさらにチャーター船を増やし、また運び、それを繰り返してぼろ儲け。

一躍時の人として名をはせた真の成金。

必要な場所で安く買い、必要な場所で高く売る。

これ商業の鉄則。

この男にはその機微を見抜く目があるのだろう。

自身にあふれた表情してゐるぜ。

腹立ってくるな。

そんな俺の内心を知らぬ内木は椅子を手で指した。

「どうぞお座りください」

「では、失礼して」

俺たちは机を挟み面と向かって座り合う。

「それで、わが国の行政官庁、内務省の官僚様が一体どのようなご用件で当家をお尋ねになられたのですか？互いに多忙な身ゆえ、単刀直入に仰って頂きたい」

座つての第一声。

さつさと用件を述べろ。

いいねえ。正直これからまた微塵も思っていないお世辞で成金の機嫌を取らなきゃいけないのかと辟易していたところだ。

そちらからそう言ってくれば、こちらも話を切り出しやすい。

さて、では鬼殺隊の隊員であるところの雷久保鳴海、すなわち俺がいったいなぜ背広なんぞを着て、官僚に化けて、時代の潮流で一山当てた成金のところに訪問したかと言うと……

そりゃあ、もちろん鬼の情報を得るためだ。

「では、端的に申させて頂きます。私どもが伺いたいのには斡旋についてです」

「なるほど。やはりそうですね……大臣の御子息ですか？であれば一人手の空いたものがおります。うちの協力会社なのですが、商社の社長令嬢でして……」

一言しか言っていないのに、円滑に話を進めていく。

これが何の話かと言うと、金持ちどもの縁談である。

この内木、財を築いて次に始めたのは地盤固めだった。

おそらくは脅されたか、商売に邪魔が入ったか。

もしくはこの先の景気が不透明なことに不安を覚えたのかもしれない。

内木は自分の身の回りの人間、海外と商いをして金や伝手を持つている奴らと政界にいる金持ちどもの縁談を始めた。

時代の新生として怒濤の勢いで伸びていく内木の伝手が欲しい同業者と、大戦景気で海外市場の広がりにより介入の余地ができ始め、なんとか乗り込みたい政治家。

需要があり、機会がある。

この男はその状況にチャンスを見た。自らの地位をただの成金から政界にコネを持つ経営者兼投資家にステップアップできると。

そして結婚相談だ。

企業の金持ちと政治家、その二つの間のブローカーをやっている。

「……ですので悪い物件ではありません」

「なるほど」

チャーター船でブローカーをやっているのと何ら変わらない。

変わっているのは売るのが物か人か、それだけだ。

「ただひとつ疑問があります。これは私のお節介ですが、通商航海は外務省の管轄では？他人の庭を荒らしても恨みを買う分だけ損です」

内木はこちらに向けてにこやかに、だが鋭い視線を向ける

それは当然の疑問だ。

もちろん俺は斡旋を頼みに来たわけではない。

鬼の情報を聞きに来たのだ。

「いえ、私は貴方に斡旋を頼みに来たものではありません」

「では何を？」

「事情聴取をしに来たのです」

内木の眉がピクリと動く。

「事情聴取？」

「はい」

「……私の行為が何か法に触れたと？私は出会いの場を設けているだけで賄賂を贈っているわけではありません」

こう反応するよな。

お偉いさんや金持ちから話を聞くのに警保局という立場はとても便利だが、身構えられてしまうところはとても面倒だ。

誰だつてやましいことの二つや二つあつてしかるべきだからな。

「任意同行というのならこちらも弁護士を」

すこし敵対的な口調になってきた内木の話を手で遮る。

「早とちりなさらなくてください。こちらは事情を聞きに来ただけなのです」

訝しげにこちらを見る内木。

「内木様は斡旋された夫妻の幾名かが失踪されたのはご存知ですか？」

「失踪？……いえ、初耳です」
だろうな。

内木は目を開き、軽い動揺。反応としては自然だ。
「どういうことですか？」

「実はここ最近、結婚なされたばかりの夫婦がそろって失踪し、夫だけが帰ってくるという事件が多発しております」

俺に下った指令はそれだった。

この町を中心として、新婚の夫婦が行方不明となる事件が最近多発している。

しばらくすると夫だけが帰ってくる。

周りの者や公的機関のものが話を聞いても男は嘆くだけで何も仔細を話さない。

自らの妻の名前をしきりに呼び、ただうなだれていると言う。

俺も幾人かに話を聞きに行ったが、本人の口から何があったか聞くことはついぞなかった。

あまりにも歪な事件が立て続けに起こるため、調査し、鬼がいるならばそう討伐をせよと産屋敷大先生に申し付けられてしまったというわけだ。

この事件のことについて俺は簡潔に内木に伝えた。

「……というわけで内木様にもお話を聞かせていただければと」

内木難しい顔をして考えていたが、すぐに口を開く。

「私が犯人だとお考えで？」

「いえ、そうではありません。ですが……」

「ではなぜ私に話を聞くのです？」

あくまで冷静に、内木は話す。

問題はこの「目」だ。

商機を逃さないこの目をどこまで欺けるか。

「被害にあったご夫婦の12組のうち、7組が内木様の紹介でご結婚された方たちだったのです。ですから内木様から彼らに何か共通点あったか教えていただけないかと……」

「私を疑っていることは否定しないのですね」

「申し訳ありませんが、仕事ですので」
悪いな。

探っても痛くない腹なら見せてくれ。

面倒は嫌いだ。

「……………」

内木はしばらく黙っている。

納得しないか。

こちらの都合しか言っていないのだから当然だが。

なら……

「ですが」

あらたに切り出す。

「私個人としては、内木様は信頼のできる方だと思います」

「商人に信頼とは……また、大きく出ましたね」

「冗談ではありません」

「理由を聞いても？」

内木は嘲笑交じりの顔で問いかける。

「目です。目は口程に物を言うと言いますが、その人間の生き方

は目に出ます。どう言い繕おうと自らの目は誤魔化せないものです」

「目……」

これは俺の本心だ。

その人間がどう生きてきたかは目に現れる。

どうしようもない生き方をしてきた人間と言うのはそれ相応の目

をしてる。

「内木様の目は重い。こういう目の持ち主にはあまりお会いできない

のです」

「重い、ね」

「ですからこの縁を無駄にしたくない。加えて、内木様はこれから景

気がどう動くかある程度ご理解しているみたいですし」

「何のことですか？」

「しらを切らずとも。内木様が政界にコネを作ろうとしているのは今後の不況をいち早く読み取り、事業を売却するためでしょう？」

「……………」

「今は欧州の戦争で好景が続いていますが、やがて戦争は終わる。戦争が終われば軍需品の需要は薄れ、欧州はいずれアジア、アフリカ市場に再び入ってくるでしょう」

「そうでしょうね」

「そうすれば日本製品は今の勢いほど売れなくなるのは確実。そうしたときに困るのはこの景気の勢いで設備に過剰投資した事業主です」
「……………」

今は軍需品に欧州という買い手がおり、市場には欧州という競合相手がいらない。

だが戦争が終われば買い手はいなくなり、市場で戦う相手ができる。

そうなれば当然売り上げは減る。

そして企業は高額な設備の維持費と商品の在庫を大量に抱えることになる。

だが、だからといってすぐに設備を売却することなどできはしない。

なぜなら設備の初期投資には大量の赤字が付いて回り、それらの赤字を回収し黒字にするまでには数年単位の時間が必要だからだ。

加えて、不況の真つただ中で不必要な高額設備に買い手がつかうか？

つくはずがない。

なら事業主が最も得をする方法は？

景気の流れで設備を作り、大量の商品を売り、戦争が終わる前に投資した設備を他の企業に売って現金化してしまうことだ。

そうすれば大きく利益を獲得し、競合他社は不況になったあとの設備維持と大量の在庫で自滅する。

「政界とつながりがあれば欧州の変化にいち早く気づけるでしょう。不況の前兆をつかめるかもしれません。それに大蔵省はある程度の企業に顔が聞く。設備の売却なんかもスムーズにできるかもしれませんね」

「……」

「そういえば私、外務省や大蔵省には知り合いがいます。なんなら話し合いの場を設けるなども出来たりするんですよ」

俺じゃなくて産屋敷の大先生がな！

俺はそんな七面倒なことはやらん。そもそも知り合いもないからできん。

「……………」

「指定席の切符があるのにわざわざ回り道をするのもないでしょう。どうです？」

俺は右手を差し出した。

内木は考え込んでいる。

俺の出したメリットと自らが作ったコネの情報を開示するメリットを量っているのだろう。

のれ。

乗ってこい。

お前にデメリットはない。なぜなら俺は鬼殺隊で、お前の作ったコネの情報などどうでもいいからだ！

流すような馬鹿はしない。

そして大蔵省や外務省へのパイプは産屋敷大先生が必ず作ってくれる！

知らんけどな！多分やってくれるぜ！

俺は俺の仕事が増えないのなら、そして俺の利益になるのなら大体の仕事は安請け合いする！

そしてそのまま丸投げする！

というかもうめんどくせえ！

なんで鬼殺隊は政府非公認の組織なんだよ！

公認なら毎回毎回こんな面倒な手回しなんてしなくても上に一報入れれば終わるのによ！

もうほんとクソだな！鬼殺隊！

殺すだけ殺して飯食ってるようなカスどもの集まりだからな！

ぜってえ辞める！

「……………」

内木は顔を上げ、俺の目を見た。
何をしている。

乗れ、俺の話に。

つかめ。俺の差し出した右手を。

俺はもうこれ以上面倒な仕事をしたくないんだ。

早くしろ。

奴はしばらく俺の顔を見ていたが、ゆつくりと右手を上げその右手で俺の右手をつかんだ。

「いいでしょう。よろしくお願いします。雷久保さん」

よおおおし!!

それでいい！それでいいんだよ！

俺は俺に対して都合よく動いてくれる奴が好きだ。

故に内木、お前がイケメンで、大金を持ち、頭の回転が速いのは大層気に食わないしムカつくが、嫌わないでやろう。

よし！

この任務の山は越えた！

被害者が金持ちばかりと聞いたときには情報収集もままならないと思っただが、流石俺。

美しい手練手管と産屋敷パワーで見事にこの事件に關与しているだろう成金から、協力をもぎ取ったぜ！

俺すげえ。

あとは情報を洗って鬼を見つけ出す、それだけだ。

鬼を殺すのは楽だ。

だって首を切るだけなんだぜ。

それに比べて人間の協力を仰ぐことの大変さといったらもうね。

相手の感情を押し量り、相手の利益を考え、そのための金を何とか工面し、人を動かし、相手の心を動かし、そうしてやっとだ。

だというのに鬼殺隊面々ときたら、鬼の首を切ればそれで終わりだと思っただが。

おい、てめえら。

殺しの能しかねえからってこういう面倒くさい任務を毎回俺に回してくんじゃねえ！

ほんとクソ。

もうやめる。まじやめる。

「それでは内木様をご紹介された夫婦の方々について伺ってもよろしいですか？」

師匠、継子にしてください

ヒュウウウウウ。

独特の呼吸音が耳をつんざく。

自らの呼吸だけに集中し、全身の力を抜く。

「ヒュッ」

かすれた呼吸を吐き出し、力を入れず全身を連動させる。

——水の呼吸 漆の型 雫波紋突き

全ての筋肉、関節を連動させ滑らかに刃を突き出す。

無音の突きは神速を持って丸太を貫いた。

音もなく貫かれた丸太はただ動くこともなく中央に刀身大の穴を開けた。

「スウ」

残身をとり、無情に丸太を見つめる。

そして刀身を鞘に納めた。

「はあ」

力を抜くと全身を倦怠感が襲う。

急に大量の泥をかぶったかのような。

やはり緩急をつけるのは神経を使う。

ただ力を入れるだけのときの100倍は神経をすり減らしている。

『力の強弱、体の伸縮、技の緩急を忘れるな』

師匠に教わったことの一つだ。

まだまだ粋は遠い。

「やっぱりすごいですね。真菰さんは」

私の稽古を賢覧していた弟弟子の炭治郎が声をかけてきた。

「動きがほとんど見えませんでした」

彼は育手である鱗滝左近次先生のもとで水の呼吸を学んだ同門だ。

そして素直な男の子だ。

「ありがとう。でもまだまだ」

称賛してくれるのは素直に嬉しいことだ。

しかし速度がどれだけあろうとも、この刀が鬼の首を切らぬ限りそこに意味はない。

そして私には彼のような膂力はない。

今までは速さで鬼を翻弄し、隙を作り、速さで持つてその首を切り捨てた。

それは良い。速さは私の専売特許だから。

だがそろそろ底が見えてきた。

速度だけに頼っていては、私はおそらく死ぬだろう。それも近いうちに。

水の呼吸が私に合わないわけではない。

ただ、水の呼吸は良くも悪くもバランスの良い剣技なのだ。

力、柔軟性、速さ、思考、精神、全てを滑らかに稼働させることこそがこの剣技の本領。

素体が力を欠いている私ではその本領を發揮しきれない。

私には速さを生かすことができる新たな技術が必要だ。

だからこそ私は鳴柱である師匠の下で“雷の呼吸”を学びたい。

と考えていると視線の上から翼を羽ばたかせる音が響いてきた。

「天楼」

見上げるとそこには師匠の鎧烏である天智天楼がいた。

「手紙ヲ持つてきたゾ」

私の腕に下りてきた天楼は独特の発音で手紙を運んできてくれたことを告げた。

「この子って真菰さんが言つてた人の？雷久保さんだっけ？」

炭治郎が鎧烏を見て言った。

「そう。私の師匠、雷久保鳴海担当の子」

「じゃあ、その人から手紙が来たんだね」

「うん」

「読メー手紙ー！」

天楼は叫びながら手紙の結んである左足を差し出した。

「ありがとう」

私はお礼を言つてこの子の足から手紙をほどき、文を広げた。
えつと……

全略？前略の間違いだろうか？
ん？

「……………」

文の中央に全略の二文字だけが書いてある。

他には何も無い……

「真菰さん？どうしたんですか？」

私は黙つて手紙を彼に渡した。

「え？俺も読んでいいんですか？えつと……ぜ、ぜんりやく……」

炭治郎は手紙を読んで固まった。

「真菰さん？この人つて真菰さんのお師匠なんですよね？」

「うん。将来的に」

「しよ、将来的ですか」

「そう」

今は違うけど、どうせなるから実質今も師匠。

「ちなみにその方にはどんな手紙を送ったんですか？」

「継子にしてくれと一文。あと、また連絡するとも」

「な、なるほど」

炭治郎は何やら冷や汗をかいている。

そうか。君も私と同じ思考に至ったのか。

全略。

全てを略す。

言わなくても分かるだろうという信頼の証。

これはつまり……

「真菰さん。とても言いにくいことなんですがおそらく真菰さんはこの方に……」

つまり……

「嫌われて「継子にしてくれると言っている」だと思ひ……え？」

そうか。

とうとう師匠も私を継子にしてくれる決断をしてくれた。

長かった。

ここに至るまで、私は師匠の家を何度も訪問し、師匠に手紙を何通も書き、師匠に弁当を作り、師匠にお金を渡そうとした（これはなぜか大激怒されたのでやめた）。

「真菰さん？」

長かった。

非常に長かった。

「真菰さん？聞いてます？」

こうしてはいられない。

時間は有限だ。

「真菰さん？どこかに行くんですか？」

「師匠のところ。教えてもらいに行く」

荷物は最小限でいい。

取り敢えずはこれだけもっていけば……

「ちよ、ちよつと待つてください！」

「なに？」

炭治郎が何やら焦った顔で私を引き留めた。

「その方のところにはまだ行かない方がいいと言いますか、行ったらむしろまずいと言いますか……」

行ったらまずい……

「どうして？」

炭治郎の目がぐるぐる回っている。

「えーつと、えーつと、あーそうだ！真菰さん！」

「うん？」

「なんで真菰さんはこの方の弟子になりたいんですか？」

炭治郎は脈絡のない質問をしてきた。

なぜ？

なぜ私が師匠の弟子になりたいか？

なぜか。

私は一度手を休め、考える。

それは………

「師匠は絶対に人を見捨てない。そして鬼に負けない」

あの時、死の恐怖を知ったあのとき、私は彼の背中を見た。

決死の覚悟なんて誰もが軽々しく口にする。

だがどんな覚悟を決めたところで、死は本当に怖い。

死に心臓を握られたとき、誰だって思うことは「死にたくない」だ。

十二鬼月に撤退戦を迫られたとき、私は自分の脆さを知った。

幾ら取り繕おうと死が絶対的な恐怖であることを思い知らされた。

だからこそ、皆が諦めて打ちひしがれて刀を手放す中で、最後まで立ち続けたあの背中を私は生涯忘れない。

師匠は私が知る限り最も人間らしくて、最も敗北という言葉から遠い人間だ。

理由はおそらくそれだけだ。

彼の操る剣技に私が魅了されたのは、速さ、力強さ、美しさ、何とでも理由はつけられるけれど、多分根っここの理由はそれだけ。

人間らしく強い。

「それだけ」

「見捨てず、負けない……」

炭治郎は呆気にとられたように私を見ていた。

「だから行かないと……」

「あ！ちよつと待っててくださいー！」

「なに？」

「いや、えつと………あつそうだ！他にもその方のこと教えてもらいたいですー！」

「そう？」

「はいー！」

「じゃあ……」

真菰の肩に止まっていた鳥は「アホウ」と鳴いた。

休みぐらい静かに過ごそうぜ

俺は宿の一室で腕を組む。

「どうしたものか……」

一度整理しよう。

交渉成立後、内木から得られた情報の多くは予想通りのものだった。

襲われた新婚夫婦はボンボン息子と良いとこの御令嬢。

縁談は親意向で、互いにコネと金のために進めた話。

新郎は主に政治家、官僚の息子だった。外務省や大蔵省の関係者が多いのは内木の思惑を考えれば大して不自然ではない。

新婦は大体が商社や鉄鋼業の社長令嬢。

貿易や造船を生業とする内木の仕事を考えればこちらも自然である。

「……………」

ピンと来るものがない。

どうにも今回の事件と情報が上手くかみ合わない。

いや、被害者と鬼との関係は不自然ではない。

鬼が女子供を好んで食べるのはよくあることだ。

女は子を身籠るため、子供は成長するため、栄養満点の肉体を持っている。

個人差は大いにあるが、男だけを食べるより多くの栄養が取れる事は確かだろう。

それは鬼として強くなることに繋がる。

だから女性ばかりが被害にあっているという事実には訝しむ点はない。

だがなぜ鬼は新婦ばかりを狙う？

この事件の元凶である鬼は、この年頃の女が好きなのか？

いや、それなら結婚している女でなくてもいいはずだ。

新妻が好みなのか？

ならなぜ夫婦揃って連れいく？

嫁だけ食べるのに旦那を連れていく理由はなんだ？

それになぜ拉致した夫を逃すんだ？

目撃者が生還する事は奴らにとって都合の良い事ではないはずだ。いくら巧妙な手口でも、立て続けに人が消えればいずれ鬼狩りが嗅ぎつける。

俺たちに見つかるリスクを冒してまで鬼が生存者を作る理由はなんだ？

「……………」

わからない。

考えれば考えるほど不自然な点が出てくる。

だが解決の糸口になりそうなものではない。少なくとも今のところは。

「……………おいおい、鬼を見つけ出すまでも面倒なタイプの任務か？
これ」

勘弁してくれよ。

ただでさえ金持ちと政治家の相手をして神経使ってるのによ。

おい！鬼！

頭使ってんじやねえぞ！

お前らなんのために強靱な体をつけてんだ！何も考えずに行動して俺たちに殺されるためだろうが！

人間の真似事なんぞしてないで、もっと欲望のままに動け！

「……………」

あと何かあったか？

……………いや、あからさまに不自然な情報はおそらく残していない。こういう場合、論理立てて推測するための材料は入念に消されている。

出なければうちの隊士が10人もやられたりはしない。

「だが」

利口な奴ほど見落とす点がある。

それは「他人の感情」だ。

証拠を隠し、犯行までの筋道を壊そうと思えば思うほど、下手人は人の感情に注目を向けなくなる。

狩りを行うものが獲物を追っていくうちに視野が狭まるように、論理ばかりを見るものは論理以外に目を向けられなくなる。

内木が言っていた情報の中でそれに関係しそうなものは……

「そういえば」

俺が見せた被害者の名簿を見て、その人間たちの基本的な情報をひとしきり喋った後、内木は顎をさすりながらこう言っていた。

『しかし……彼らですか……』

『何か気になる点でも?』

『いえ、そうではないんですけどね。私が主導した縁談の中でも彼ら7組はよく覚えていますよ』

『なぜです?』

『いえね、その7組は妙に馬の合う男女だったんですよ』

『馬の合う?』

『ええ。縁談と言うとまあ、親同士が決めたものですからあからさまではなくても当人たちは複雑な感情をしばしば抱くものです。ですけどその7組はお見合いをして1時間前後で自然な笑顔を浮かべるぐらいには気が合ったようで、まるで初恋のような顔をしてましたよ』

『はあ……初恋ですか』

『挙式のと きも、その7組の御夫婦には笑顔で感謝されて戸惑いました。我々の都合で押し付けて、さてどんな恨みを買ったかと思いきや、まさか笑顔でありがとうと言われるとは。あれほど面食らった出来事はあまりないですね』

はははと笑い声を上げる内木を見て、そんなことどうでもいいわと俺は内心舌打ちしていた。

が、ともするとこれはとても重要な情報なのかもしれない。

相性の良い新婚夫婦を狙う鬼。

その動機はなんだ……??

「……………」

……知るか。鬼の動機なんて。

人間を食べたい奴らの動機なんか分かってたまるかよ。

「はああああ」

俺は大きなため息を吐いた。

良くないな。

思考が大分投げやりになっている。

この任務が始まってから、他人の感情を追いかけてるせいだ。

こういうのは良くない。

このまま考えていても自分の正当化と他者への批判が始まるだけだ。

思考は適切に使わなければ自らを蝕む毒になる。

思考が飽和点に達したときにやることは行動だ。

やるべき仕事には困っていない。

むしろありすぎて困る。

俺は顔を上げた。

窓の奥に広がる一面の青空に黒点があった。

鳥だ。見慣れた鳥が羽ばたいてくるのが見える。

「とりあえず報告書を書きあげておくか」

あと何か甘いものが食べたい。

§

「こんなもんか」

俺は喫茶店のテラス席でそうつぶやいた。

書き上げた報告書ざつと読み返し、不備がないことを確認する。

大丈夫そうだ。

「じゃあ、天楼。頼むぞ」

俺は書き終えた報告書を封筒に入れた。

今回は量が多いのでひもを通してある封筒に入れ、鳥の首にかける

「出るヨ。会議」

「やだよ」

「怠慢ノ権化メ」

天楼は失礼なことを言い残して飛び去った。

生意気な奴め。

俺のような勤勉な鬼殺隊がほかにいるか？

いるんだったら面倒な任務やれよ。

大体お前も人のこと言えねえだろ。

なんだよ、あの手紙は。

帰ってきてすぐに鳥が俺に差し出した手紙。

あのアホもやつと諦めたかと思っただけ読んでみたら、『今から行きま

す』の一文だけ書かれていた。

ホラーかよ。

俺は『お前は相手にする価値がない』という一念を、あの『全略』

の二文字に注いだというのに。

何をどう解釈したら今から行くという返答になるのか。

意味不明すぎる。

真菰とかいうガキもしつこい。

とある任務であいつを含めた部隊が全滅しそうになっていたから、

逃げる手助けをしただけだというのに。

それが何を間違えたら俺の継子になるという考えに至るのか。

お前、水の呼吸の使い手だろ。俺に教わってどうするんだっての。

「お、お待ちせしました……」

傍から声が聞こえて、俺は顔を上げた。

女給が緊張した面持ちで立ってた。

そして俺の顔を見て、恐る恐ると言った様子で頼んだものを机に置

いた。

最近では街中で女性が働いている姿をしばしば見るようになった。

女性の社会進出が騒がれるようになって数年、国会前のデモを見る

と親に玩具をねだる子供を見ているような気分になるが、俺は今考え

を改めた。

野郎に注文を聞かれるよりも綺麗なお姉さんに対応される方がよほど気分がいいと。

「どうもありがた……」

「失礼しますー!」

礼を言おうとしたら、すぐに奥へ引つ込んでしまった。

なんだ？俺はライオンかなにかか？

そりゃあ、鬼を切り殺して生きている人間だから？まともな人間に比べれば雰囲気がおかしいことは認める。

目つきが鋭すぎることもまた認めよう。

だからといって客商売であればあからさますぎるのでは？

「まあ、慣れてるけど」

やはり男も女もあまり変わらん。

ちよつと機嫌を損ねながら皿の上を見る。

そして俺は機嫌を良くした。

皿の上にあるのはしゅーくりーむという洋菓子だ。

西洋風に言うと「でぎーと」と言う。

これはバターや小麦粉、卵、水などをこねて作られた生地を中が空洞になるように焼き、その空洞にかすたーどくりーむを詰め込んだものだ。

ちなみにかすたーどくりーむとは卵黄と砂糖をよく混ぜ、小麦粉を加え、温めた牛乳を少しずつ加えて伸ばしながら、とろみがつくまで加熱したもの、らしい。

詳しいことはよく知らない。

重要なことはこれが滅茶苦茶うまいということだ。

最近になって喫茶店に普及し始めた洋菓子だが、とにかくうまい。

漂う香り、柔らかな生地、そして中からあふれ出てくるくりーむの滑らかな甘み。

もう最強。

これを考えた奴に俺は人生最大の称賛を送りたい。

初めて食べたとき、俺はほっぺたが落ちると言う言い回しが誇張表現でないことを初めて知った。

菓子で機嫌を直す俺は単純すぎるか？

だが面と向かって馬鹿にされても、笑顔で受け流す程度には絶妙な美味しさがこのしゅーくりーむにはある。

任務でこの町に行くことが決まった時、これを出すお店があると聞いてから俺はずっと食べたくてしようがなかった。

任務はクソだが、甘味に罪はない。

いぎ、実食。

「いただきます……」

皿の上にある世界最高の菓子に手を伸ばそうとしたとき、喫茶店の中から甲高い音が鳴り響いた。

反射的にそちらを見ると陶器のお皿が割れて床に散らばっていた。

その机には怒り心頭と言った表情を浮かべて座っている男と、その男に手首をつかまれている女給。

面倒事の予感だ……

「ふざけんなー！」

「お、おやめください、お客様」

俺はすぐさま視線をしゅーくりーむに戻した。

努めて無視。

他人のいぎごぎなんぞ関わるだけ損だ。

そもそもこの状態に至るまで一部始終を見ていない人間が入り込めば、状況を悪化させるだけだ。

他所でやれ。

もしくは店長。あんたが穩便に納めてくれ。

俺は心の中で店員に黙祷をささげ、心をフラットに戻す。

よしそれではいぎ、この至極の甘味をいただく……

「いい加減にしやがれ！」

怒号と共に、バンツ！と鈍い音があたりに響いた。

嫌々ながらそちらを見ると興奮した男と床に倒れている女給がいた。

どう考えても男が怒りのままに女給を殴ったとしか見れん。

おい。

おいおいおいおいおいおいおい。

俺の至福の時間に一体なんてことをしてくれてんだ。

公共の福祉に反しない。真つ当な店でまっとうな人間が提供する甘味。

そして俺は金を払っている。

誰もが損をせず、堅実かつまともな素晴らしい余暇の時間。

クソみたいな仕事をしてる分、休みはまともな時間に浸りたいんだ。

バランスが大事なんだよ。

だというのにこの男、暴力使っちゃったらそりやあまともな時間じゃねえよ。

そう言うのは良くねえなあ。

ふう。

俺は一呼吸で男の横に行き、肩を叩いた。

友人の肩を叩くように気安くだ。

男と倒れてる女給は急に現れた（ように見えただろう）俺に驚いて固まっていた。

「お疲れさん」

男は俺に声をかけられて戸惑っている。

そうそう。混乱しとけ。

俺はなれなれしく肩を組んで、彼に小声で話しかけた。

「あんたも大変だな。忙しい仕事の合間、たまの休憩にこんなことになっちゃまって」

「あ？」

「女給の態度酷かったもんな。ありやあ、怒って当然だ」

男の警戒心が薄まるのが見て取れる。

もちろん俺の口から出ていることは出まかせだ。

こいつが何で怒ってるのかとか知らんし。

いざこぎ介入の鉄則その1。

盗人にも五分の理を認めよ。

自分が正しくないと思いなから行動できる奴なんてほぼいない。

客観的にどう見えようが、いかなるクズであろうとそいつの頭の中では自分の行動が正しいと認知されている。

どれだけ極端な論理でも、過剰なまでの自己正当化で必ず相手を悪者にする。

だから暴力や恐喝をしている奴がいたとして、お前が悪いと言い放って解決することはない。

言えば言うほど、「俺が声を荒げているのはあいつがこうこうこうで、こんなに悪いことをしてきた。だから俺は仕方なくこうしたんだ。」

そう言われるのがオチだ。

まずは相手を認める、それが理性を保たせるコツだ。

「俺だつて怒るかもしれない。最近はこういう接客が増えていけないよな」

「あ、ああ。そうなんだよ」

「ほんと、腹が立つぜ」

そう言つて俺は懐からあるものを出して奴の手に握らせた。

「……………？」

「でもよ。こんなことであんたの休みが無為になっちゃうなんてもつたいたないじゃねえか」

男は手のひらのものを見て、目を見開く。

そこにあるのはこの国が発行する紙幣の中で、最も価値を持つそれだ。

「だからこれで酒と女でも買ってパーツとやっつけ。どうせならもつと愛想のいい女口説いとけよ」

男は具体的な想像ができたのか、少し口角を上げ、目が緩んだ。

最後の一押し。

「仕事が疲れるのはわかるからな。ここは俺のおごりだ」

「……………しようがねえな」

にやつきながら男はそうこぼした。

「おい、てめえ。次はもつとまともな接客しろよ」

倒れてる女給にそう言い残すとクズ以下の味噌つかす男は店を後

にした。

「……」

見たか、この俺のまとも人間ムーブ！

一切手を下すことなく、恨みを買うことなくいちやもん野郎を撃退した。

すげえな俺。

もはやまっとうな人間筆頭では？

……出費は痛かった。

だがあのクズ以下野郎を視界から消すためだと思えば安い。

俺は未だに床で固まっている女給に手を差し伸べた。

「大丈夫か？あんだ」

女給ははつとして顔を上げた。

お、髪で隠れて見えなかったが、随分と端整な顔立ちの女だ。

通りを歩けば、男の一人や二人は振り返るだろう。

これはさっきの男が無理矢理言い寄ったパターンか。

「す、すいません」

「ほれ」

手を軽く揺らす。

女給は俺が言わんとすることが伝わったのか申し訳なさそうに右手を握った。

「つと」

軽く引き上げて女給を立たせる。

「ちよつと失礼」

俺は立ち上がった女給の腕をとる。

青あざになってるな。

俺は荷物から塗り薬を取り出して女に渡した。

「え……」

「さっき殴られたところが少し痣になってる。すぐ治るし痕にはならないと思うが心配なら使っとけ」

「い、いえ、そんな」

「あと、あの男の伝票貰えるか？ついでに払っとく」

何だよ、机の上にあんじゃねえか。

俺は机の伝票をひったくるようにとった。

「悪かったな、騒いじまって。店長にも謝つといてくれ」

よし、やつと食べられるぜ。

すいーつの良いところは時間が経ってもままずくならないところだ。

温かい料理と違い、出来立てでなくても美味しい。

もしかしてお菓子とは万能食なのでは？

「あ、あのー」

席に戻ろうとしたら後ろから声を掛けられる。

もう何だよ。

そろそろ食わせてくれよ、しゅーくりーむ。

嫌々ながら振り返る。

予想通り目線の先には女給が迫っていた。

何ですか？

物壊してないし、弁償するものとかないよな？

それともあれか？もつと早く助ける的なあれか？

「助けていただいてありがとうございます」

すぐさま女給が頭を下げたのには面食らった。

こんなに素直に礼を言われたのはいつ振りか？

大体の人間は自分の不幸を嘆くのに忙しいというのに。

「……………おう」

「ですが」

ん？

「さきほどあのお客さんにお金を渡されていましたよね？それも高額な紙幣を」

「……………ああ。それが？」

「そういうのは良くないと思います」

女給がはつきりとした声で俺に言った。

「……………」

俺はポカンとした表情になっていると思う。
すぐさま腹がいたくなってきた。

もちろん笑っているせいだ。

「くくくっ……」

おい。

おいおいおい。

この女、やべえ。

滅茶苦茶まともな人間だ。

すげえ！その価値観、まっとうな人間のそれじゃん！

は、腹痛い。笑いが止まらない。あ、涙出てきた。

笑いで震える腹を抑えながら、俺は返事をした。

「そ、そりゃ、そうだ。ほんと、良くないよな。こう言うの」

俺は財布から紙幣を出した。

そして自分とあの男の伝票と合わせて女給に渡した。

「おつりはいらぬ。お店の今後に投資ってことにしてくれ」

俺はポカンとする女給にそれだけ言った。

そしてテラス席に戻り先ほど出されたしゅーくりーむを口に放り

投げ、一口で食べる。

お、やっぱ美味しいな。

「じゃ、ごちそうさん」

それだけ言って店を後にした。

§

妙にイラつく。

向こうから歩いてくる男。

売り子をしている女。

店先で居眠りをしている老店主。

俺の目に映る人間全員が俺のようなクズよりまともな人間に見える。

「……………」

理由は単純だ。

俺は自分に落胆し、あの女給に嫉妬したのだ。

大金を渡して、面倒事を回避する。

この世の中で生きていくには賢いやり方だ。

それはべつに問題ではない。

ただそれを、息をするように行う人間性に問題がある。

やるにせよやらないにせよ、このやり方は世間的には悪であると認識していなければだめだった。

俺は鬼殺隊をやめて、まともな人間でありたいと願っていたがそのための考え方を全くしていない。

そのことに気が付いてがっかりした。

あの女給の前でした笑いは空元気だ。

あの女給の感性に嫉妬したことを認めたくなかった。

だから笑って店を出た。

一つ気がかりなこともできた。仕事をしていれば気も晴れるだろうと思つて。

だというのに……

「なあ？なんであんたは俺についてくるんだ？」

さっきの女給は町を進む俺の後ろを歩いてきていた。

俺の質問に対し無然とした顔で女給は答えた。

「私はまだ貴方にお礼をしております」

「お礼？」

「お店でお客様に乱暴されたときに助けていただいたお礼です」

律義だな。

すごいまともっぽい。

ムカつくから失せてくれないだろうか。

「あれは俺が静かにしゅーくりーむを食いたかったからやっただけだ」

これは紛れもない本心だ。

実際あの男と女給が店の奥で騒いでいたら、暴力を振るわれていても俺は何もしなかっただろう。

「ですが結果的に私は助かりました」

「それに、俺は男に金を渡して追っ払ったんだ。そう言うのは良くないってあんたも言ってたろ？」

「手段と結果は別物です。やり方が悪かったからと、善良な行為そのものを否定するのは良くないと思います」

「……………」

なんなんだ？

この女は。

利口な奴というか、口が達者というか。

なんにせよ面倒なことだ。

「仕事ほっぽり出してきてよかったのか？クビになっちまうぞ？」

どうにもきつきのことに關してはこいつの中で完結しているようなので、別口から攻めてみる。

俺が店を出てきてから、この女はすぐに追いかけてきたのだ。

頭が回るんだか、鈍いんだかよく分からないが、仕事が無くなれば首は回らないだろう。

「大丈夫です。問題ありません。あそこは私の店ですから」

私の？

勤務しているからそう言うこともできなくはない、か？

にしては大仰な表現だが。

「むしろあの店の備品があれ以上壊されなかったことへのお礼という意味では、仕事をしていると言えます」

「……………」

無敵かこいつ。

「……………」

「……………」

俺の足音に女給の足音が続く。

「……………」

「……………」

少し速足で歩く。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

俺は大きなため息を吐いた。

そして振り返る。

「分かったよ。分かった」

女給は首を傾げた。

「分かったとは、何がですか?」

「降参だよ。降参。あんたの感謝も受け取るし、礼も承る。だからさっさとやってくれ」

追い返せないのなら相手の気がすむように動こう。

それでさっさと仕事に戻ろう。

「?」

不思議そうな顔をするな。

俺は話の流れに沿って返答をしたはずだぞ。

「なんで首をかしげる?」

女給の目が瞬く。

「いえ、既にそのつもりでいらっしやるのかと思ひまして」

「は?」

「だって私の拙宅にまっすぐ進んでいらっしやるので」

おい、待て。

俺は少し確認したいことがあったから、昨日通った道に戻っているだけなんだが……

ちようど俺の目的地が見えてきたところで、女給は言った。

「そう言えば、まだ私の名前を申し上げておりませんでした」

やめろ。

聞きたくない。

「私は内木千代と申します」

内城?内記?内貴?家城?

「もしかして、あんたの家って、あの西洋風の邸宅じゃないよな……?」

「やはりご存知でしたか」

目的地に着くと昨日見た屋敷を背にして女給はこちらを見た。
ウチキチヨと名乗った女は背筋を伸ばし、とてもきれいなお辞儀を
した。

「当家へようこそ。内木汽船を取り仕切っております内木信成は私の
愚兄でございます」

なんで成金当主の妹が喫茶店で働いてるんだよ。

私、とても迷惑しているんですよ？

右手に手紙を持ち、小走りで廊下を進む。

すこしだけ息を荒げながら目的の部屋に着くと、勢いよく引き戸を開いた。

「しのぶ様！雷久保様からお手紙が！」

何やら書き物をしていたしのぶ様はゆっくりと顔を上げて笑った。

「アオイ、そんなに力を入れたら扉が壊れてしまいますよ？」

「あ…すみません」

興奮していて気が回らなかった。

そんな私がおかしいのか、しのぶ様はクスクスと笑った。

「冗談です。アオイは真面目ね」

「す、すみません」

頬が赤くなるのを感じた。

恥ずかしい……反省しないと。

「雷久保さんからの手紙はそれかしら？」

「あ、はい！これです！」

私はしのぶ様にお手紙をお渡しした。

「ありがとう」

しのぶ様は笑顔でお礼を言って、手紙を机の上に置いた。

開けないのだろうか？

「……」

「……そんな目をしなくてもすぐ開けますよ。」

「え!!」

「ちようど休憩にしようと思っていたの。片付けてしまうから少し待っていてね」

しのぶ様は私の反応を見て、また笑った。

顔に出していただろうか？

しのぶ様は手早く薬の調合に使っていた器具を片付け、机の書き物を戸棚にしまった。

そしてこちらに向き直り、手紙を開いた。
取り出されたのは数枚の文と報告書のようなもの。
しのぶ様は手早く全体を確認する。
今回は量が多い。

もしかしたら……

「よかったわね、アオイ。ほら」

しのぶ様は数枚の文から一枚を抜きだした。

三つ折りにされてある紙の裏側に『神崎アオイ様』と書かれていた。

「あ、ありがとうございます！」

私は慌てながら、手紙を受け取って開いた。

神崎アオイ様

拝啓

ようやく草木もえいずる季節となりました。いかがお過ごしでしょうか。

薬品の調査において神崎さんが腕を上げたと胡蝶様よりお聞きしました。素晴らしいですね。あれから神崎さんが自らの道を見つめられたこと、そしてその道を進み続けていること、私は嬉しく思います。ぜひとも己の研鑽を余念なく続けて欲しいです。

私は相も変わらず鬼を探し回る日々を送っています。偉そうなことを言っている割には代わり映えのしない毎日に、深く恥じ入っている次第です。私が蝶屋敷へ送られることがあればその時は神崎さんに治療をお願い申し上げます。

それでは、ご自愛専一にお過ごしください。

敬具

雷久保鳴海

「雷久保さん……」

忙しいだろうに態々手紙を書いてくれた。

毎回読むたびに心が温かくなるような思いやりにあふれた手紙だ。ほわほわする。

あれから何度か文を頂いている。
気を使つてくださっているのだと思う。
やはり雷久保様はとても優しい方だ。
ほつと息を吐いて私は顔を上げた。

「っ!!」

そして私は声ならぬ声を上げた。

そこには雷久保様からの文を読んだしのぶ様が青筋を立てて、みたこともない形相をしていたから。

手がプルプル震えている。

「あらあら、あらあらあらあら」

「し、しのぶ様……?」

「柱合会議にいらつしやらない? 雷久保さん。私、あなたが何をおつしやっているかよく分からないのですけれども」

「あの……」

「鬼殺隊の不撓不屈ふとうふくつとまで呼ばれる貴方が毎回、毎回、柱合会議にいないことがどれだけ問題かご存じでない……?」

「……………」

「どの柱が手紙を出しても返事をよこさず、あまつさえお館様のお手紙さえも無視して……」

「……………」

「かつての部下や怪我人にだけ連絡を取ることから、蝶屋敷にいるという理由だけであなたとの連絡係に任命された私がどれだけ苦労しているか……」

しのぶ様の手の中で手紙がクシャリとつぶれる。

雷久保様はとても優しい。

自分より階級の低い隊士、隠れの方々、鍛冶師、負傷者に対して気遣いと思いやりを欠かさない。

いつも乱暴な言い回しをお使いになるから少し分かりにくいけれど、それは確かだ。

任務で雷久保様とご一緒した隊士の中に、あの方に対する心象が良くない人はほとんどいないと思う。

あの方の乱暴さと其処に隠れている優しさがみんな好きなのだろう。

でも柱の方やお館様には何故かその優しさを見せない。

手紙は返事をよこさず（あの方のことだからおそらく読んではいらぬ）、協力任務は頑として拒み、やらざるを得ないときは極力別行動。お館様のことは「産屋敷大先生」と呼んでいたけれど、言い方は人をからかうときにそっくりだった。

たしか理由は……………

「俺は回復したぜ！飯をよこせ！」

思考にふけっていると、引き戸が勢いよく開いた。

そこには猪の被り物をつけた少年が日輪刀を両手に騒いでいた。

彼の名前は嘴平伊之助。

鬼殺隊の隊士。

そして関節が柔らかすぎ、回復が早すぎ、毒効かなすぎ、話聞かなすぎと、すぎが多すぎ少年だ。

「ちよつとあなた！また動き回って！絶対安静だと何度も言っているでしょう！」

「うるせえ！チビ！」

「何度も言っていますがその呼び方止めてください！大体背丈だつてそう変わらないじゃない！」

「チビはチビだ！」

「だから……………っ！！」

「っ！！」

私と伊之助君は二人して固まった。

しのぶ様があの形相のままこちらに微笑みかけていたから。

「伊之助くん？言いつけはちゃんと守らないとだめですよ？」

「……………はい」

「アオイ？看護する人間が患者と言い争いしてどうするの？」

「……………すいません」

私たちは気づいたら正座していた。

しのぶ様の背後にゴゴゴゴゴゴツという文字が見える…

うう。やってしまった。

しのぶ様は軽くため息を吐いた。

「全くあなたたちと言いい、あの人と言いい、なんで私の周りには面白い人が集まるのでしょうか？」

それは多分、しのぶ様もそちら側だからではないでしょうか？

とは口が裂けても言えない。

「しのぶ、手の中でくしゃくしゃになってるそれはなんだ？」

隣に震えていた伊之助君は雷久保様の手紙に気付いた。

「ああ。これは……………」

「鼻かんだちり紙か？きったねえな！」

そのの言葉を言い放った直後、彼の頭は床に沈んだ。

なぜ伊之助君はいつもひとつと余計なのだろう。

「これは他の柱からの手紙です。現状の鬼の情報を知らせてくれたんですよ。分かりますか？伊之助君？」

「ばい」

「何か言うことは？」

「すみません」

すごい声だ。

「よろしい」

にこりとしのぶ様が笑う。

怖い。

「その柱はつええのか？」

先ほど沈んだはずの伊之助君はもう起き上がっていた。

何という精神力と肉体。

やっぱり回復が早すぎる男の子だ。

「雷久保さんですか？」

「名前は知らん！それを寄越した柱だ！」

「強いですよ」

断言していた。

しのぶ様が強い弱いという抽象的な言葉を使うのは珍しい。

医療を担う人であるからいつも言葉は具体的だ。

伊之助君もその言葉の力強さになにか感じ入るものがあつたようだ。

いつも騒がしさが鳴りを潜めている。

「……どんくらい強いんだ？しのぶよりもか？」

「どうでしょうか？少なくとも彼が任務でミスをしたという話は聞いたことはありませんね」

「……………」

任務でミス。

それは鬼殺隊に求められる2つの使命を完遂できなかった時に使われる。

2つの使命。

1つは鬼を殺すこと。

2つは人を助けること。

言うのは簡単だが行うのはとても難しい。

鬼が強ければ強いほど、その鬼を殺すことは困難となり、周りの人間を守ることはさらに難しい。

だけれど雷久保様はどんな状況であつても鬼に負けず、人命を諦めない。

それは鬼殺隊の隊士であつてもだ。

死を覚悟している私たちでさえあの方は絶対に諦めない。

どんなに追い詰められても絶対に救い出す。

ゆえに不撓不屈。それがあの方につけられた異名だ。

「……………勝負だ」

「はいつ？」

「勝負しろ！ハギクモ！俺と戦え！」

伊之助君が日輪刀を掲げて騒ぎ始めた。

また、始まってしまった。

「雷久保さんにお会いする機会があれば頼んではどうですか？伊之助君」

しのぶ様はにやりと笑っていた。

あ、これ絶対にいつもの意趣返しだ。

「おお！するぜ！」

「雷久保さんなら必ずやってくれると思いますよ」

「はっはっは！そうか！」

「ええ。だから立ち会ってくれるまで言い続けなさいだめですよ？」

「当たり前だぜ！待ってやがれ！ランクボ！」

金持ち兄妹は良く分からない

俺は客間に座っていた。

先日来た客間の、先日座った椅子でだ。

どうしてこうなった……………

俺の動きは完璧だったはずだ。

できる限り金持ちどもに接触せずに情報を集めて回り、リスクを最大限回避。

必要な情報を収集し、できうる限りの準備をしたうえで最も中核にいる成金に接触。

そして友好的な交渉で協力を取り付け、外堀を埋めた。

あとは俺の敷いた搜索の輪を少しずつ狭めていけば自然と鬼が浮き彫りになる。

そのはずだった。

「マジでふざけんな…………」

たまたま休憩に寄った場所で、たまたま喧嘩が起きていて、たまたまその諍いの仲裁をして、そのうちの片方がたまたまその成金の身内だった。

こんな偶然があるだろうか？あつてたまるだろうか？

「あつたからこうなったんだよなあ」

あの女、内木千代とか言ったか。

あいつには縮地の歩法を見られている。

喧嘩を止めに入ったときに男の側まで行った時の移動方法だ。

あの女には俺が急に現れたように見えただろうし、あまり記憶には残っていない可能性の方が高い。

だがあの後もチンピラ男に金を渡し、粗暴なしゃべり方で内木千代をぞんざいに扱った。

せっかく優秀で頭がキレ、物腰の丁寧な官僚という虚像を作ったのに。

これでは俺の努力が水の泡だ。

というか。

お礼って何をする気なんだ？あの女。

チンピラ追っ払ったお礼なんぞ、そこから団子の一つでもおごって
くれればそれでチャラだ。

さつき会ったばかりの男を自分の家に連れてくるって。

危機意識が低すぎる。

美人局の類？

成金とはいえ、ここまで有名な経営者の妹がそんなあくどい商法を
使うと言うのもしつくりこない。

あの男の身内というのならもう少し賢く稼ぐだろう。

カチャリ。

客間の扉が開いた。

そこから出てきたのはもちろん内木信成と内木千代の二人。

違うのは格好で、内木信成は先日の交渉時より明るめの背広を着て
いた。

内木千代はたすき掛けに前掛けをした女給の格好から、袴に着替え
ていた。

どちらにしても少し明るい色合い。

随分とこぎれいな格好だがこれから社交界にでも行くのか？

「お待たせいたしました」

内木兄がうやうやしくお辞儀した。

こちらにも立って返礼する。

「いえ」

「初めまして、私は内木信成と申します。この度は私の愚妹を助けて
いただきありがとうございますございました」

初めまして……？

「感謝の言葉もございません。どうお礼をしたらいいか……」

「あの……内木様？」

「はい？」

俺は感極まっている内木兄に声をかけた。

内木兄は動きを止めてこちらを見る。

目が合った。

「昨日はお世話になりました。雷久保鳴海です。」

俺はもう一度頭を軽く下げる。

内木兄が固まった。

？

反応がない。

「昨日、商談の件でお話いたしました、よね……？」

妹がああ縁談について知っているか分からないのでぼかして言った。

え？まさか俺の顔、忘れられてる？

目つきのせいで恐れられることはあっても、忘れられたことはない。

そんなことある？

二人して固まった。

「お話し中失礼いたします」

どうしようか迷っていたら内木妹が割って入った。

「察するにですが、雷久保様は私の兄と面識をお持ちで？」

「ええ……」

「そうですか。それはなんの茶菓子もお持ちせず失礼しました」

内木妹は固まった兄の腕をつかんだ。

そして扉へと引っぱり……

「少々お待ちください」

そう言つて二人で外に出た。

「……………」

え？

なに？

外側から声が聞こえる。

「兄さん。お知り合いでしたら最初にそう仰つて頂かないと」

「え？見るまで分からない？そんなことは相手様には関係ございませ
ん」

「お知り合いの方になんの贈り物もなしにお話なんて、できようはず

もありません」

「今すぐにお送りの品をお持ちになってください。結納品とは別のものです」

なんか言い争ってる声が聞こえる。

いや、内木妹が一方的に起こっている声だけど。

え?……え?

どうした?内木信成。

お前、もつと頭の回転が早い、面倒臭い奴だったよな?

どうした?

身内が絡むとポンコツになるタイプか?

少し待っている二人が再度入室してきた。

そして内木信成の手には小さな箱が握られていた。

「申し訳ありませんでした。雷久保さん」

彼は深く頭を下げた。

「まさか妹を助けたのが貴方だったとは。思わず固まってしまいました」

先ほどの故障も何のその。

先日のように接してきた。

こいつどんだけ妹好きなんだよ。

「いえいえ。私もまさかお助けした女性が内木様の妹御様だったとはつゆにも思いませんでした」

いや本当にな。

マジでな。

「内木様はなどは。お止めになつてください。うちの愚妹を助けていただいた方にそんなふうにご読んでいただくわけには参りません。どうぞ信成とお呼びください」

やだよ。

もう、そういうのいらねえから。

頼むから俺を帰して。

「そんな……」

「いえ。お願い致します」

内木兄が頭を下げた。
もう面倒臭いだって。そういうの。
クソ。

でもここで下手を打ったらせつかく苦勞して作った協力者が無駄
になってしまう。

しょうがない。

耐えろ、俺。

「それでは……信成さんと」

内木兄は顔を輝かせ、俺の手を握った。

「ありがとうございます！」

握るな握るな。

もつとドライブに行こうぜ。

俺とアンタはこう、ビジネスパートナーみたいな関係だろう？

親戚に向けるような目で俺を見んな。

ぶん殴りたくなってくるから。

「どうぞお座りください」

「失礼して」

内木兄は着席を進めてきたので座った。

その後内木兄が座った。

「……………」

内木妹が立ったまま無言でこちらを見ている。

いや、座れよ。

「……………妹御様もどうぞおかけになってください」

うやうやしく内木妹に言った。

彼女は無言で内木兄に視線を向ける。

「お言葉に甘えさせてもらいなさい」

そう言つて彼は頷いた。

彼女は彼の言葉を聞いて頷き、ようやく座った。

「失礼いたします」

二人と向かい合つてすぐに内木兄が話を切り出した。

「雷久保さん。改めてお礼を申し上げます。妹を助けてくださり、本

「当にありがとうございます」

二人は静かに頭を下げた。

頼むから勘弁してくれ。

内心そう思いながら慌てた演技をする。

「頭を上げてください。私はただ困っている人を助けただけで、何もお礼を言われることはしておりません」

二人は顔を上げ、内木兄は首を振った。

「いえ。雷久保さんには当たり前前のことでも、私どもにとってはとてもありがたいことなのです」

彼の言い方にはどうにも含みがあった。

藪をつつきたくはないが、どうせ聞かなきや話が進まないんだろ。

わかってるよ、聞くよ。

「それはどうして?」

「雷久保さんは既にご存じでしょうが、私は時流を読んだただ成り上がっただけの身です。私、個人の力は大したことがないのです」

時代を読み、人の欲を読み、金を生み出す。

これはただの人間にできることではない。

皆が息をするようにできるのなら、内木はここまでお金を稼ぐことができなかっただろう。

少なくとも俺はそう思う。

「お金が集まってくれば私を良く思わないもの、利用しようとするもの、陥れようとするもの、色々な人間が集まりました。命が脅かされたことも1度や2度では収まりません」

金は人や物の流動性を高める。

価値の交換を目的として作られた指標なのだからそれは当たり前だ。

だが、良くも悪くもその当たり前が人の多大な影響を与えることは事実だ。

「両親は早くに他界しました。だからこそ、生きていくため、お金を稼ぐことに必死になっていたわけですが、そのせいで生を脅かされるとは笑えません」

内木は苦笑いする。

その苦笑いには多くの苦労が透けて見えた。

そしてすぐに笑みを消す。

「誠に遺憾ですが、妹また何度もそう言った経験をしました。暴漢に襲われ、雇っていた護衛に裏切られ、命を危険にさらされました」

「それは……もどかしいですね」

「ええ。本当に。事業を起こしたのは私です。ですから私がリスクを取らねばならないのは当然のこと。ですが妹は何も関係ありません。ただ私の妹であるだけなのです。なのに私のせいで何度も怖い思いをさせてしまった」

彼は目を伏せる。

内木千代は表情を変えず話を聞いている。

もしかしたら彼女が所々で見せるあの胆力は、彼女の経験から作られたものなのかもしれない。

内木が再び目を上げたとき、その目は明るさを取り戻していた。

「ですから、善意で助けていただくという経験は私も妹もほとんどないのです。本当にありがとうございます」

「ありがとうございます」

内木は再度頭を下げた。

そしてすぐに妹も頭を下げる。

「これはお礼の品です」

そう言って内木は持ってきた小箱を机の上に置いた。

「欧州で作られた時計です。留め具が付いていて手首につけることができます。珍しいタイプですが懐中時計より使い勝手が良い。官僚でお忙しい雷久保さんにはとても有用だと思えます」

内木は小箱を開いた。

そこには小石ほどの大きさの金属時計を皮のバンドで通したものが入っていた。

なるほど。

あの皮のバンドを手首に巻いて、金属の留め具で固定すると。

あちらではこんな時計が作られているのか。

個人がいつでもすぐに時間を確認できる時計。

これは便利だ。

各々の感覚ではなく、客観的な時間の指標が常に確認できるのならば大人数の行動でも容易に統制が取れる。

すごいな、海外は。

貴族的な飾りでもあろうが、これは実用的だぞ。

とても欲しい。

とても欲しいが、受け取らない。

ただより怖いものはないというが、こんなもの貰った日にはどんな首輪をつけられるか分かったもんじやない。

ここはなんとか穏便に。

協力関係を崩さない程度で力で断らなければ。

「ありがとうございます、信成さん。ですがこれは受け取れません」

内木は動揺した。

「なぜですか？」

「私が善意を装って、妹御様をお救い申し上げた人間であつたらどうするのでですか？」

俺の言葉に内木は目を見開き、さらに動揺した。

よし、いいぞ。

自らの不注意を恥じる。そして指摘されたことに対して軽く怒れ。

それでいい具合の距離感ができるはずだ。

「お話を聞いて、お二人がいかに辛苦の道を歩いてきたかはよく理解いたしました。あなた方はとても強い。強く生きてきた。だから言わずにはいられません。」

二人の目を真つすぐに見て言う。

「あなた方が兄弟の境遇を理解し、その苦労に寄り添うふりをしてあなた方に近づくものだって現れましょう。そのうちの一人が私であつたらどうするのですか？」

「……………」

内木は呆気にとられている。

そこまで驚くことじゃあないだろう。

この世はとても恐ろしく怖い。悪を行うのは鬼だけじゃない。人を騙そうとする人間もごまんといる。

他人の苦勞に漬け込むクズ以下の人間だっっていくらかいるだろう。海千山千のあんたならそんなこと、とつくに弁えているはずだろ？だから今まで妹を守ってこれたんじやないのか？

「ご兄弟二人だけ支え合ってなんとかここまで来たのでしょうか？ここで気を抜いてはいけません。貴方たちにふさわしいのはハッピーエンドだ。二人がともに幸せになって、めでたしめでたしと言えるような人生を送って欲しい」

俺は小箱を二人の方へ軽く押し込んだ。

「ですからこれは受け取れない。今ここで私がこれを受け取ってしまつたのなら、その隙がいつかあなた方ご兄妹を殺す日が必ず訪れる。私は、悲しい終わりが嫌いだ」

助かるべき人間は絶対に助ける。

クズの俺がクズ以下にならないために、これだけは譲れない。

心優しい人間が割を食う、そんなクソみたいな慣習は叩き斬る。少なくとも俺の前では。

「……………」

「……………」

二人は目を見開いて固まっていた。

少し言いすぎたか？

縮まりかけている距離を離すのならこれぐらいのお節介がちやうどいいと思つたんだが、やりすぎか。

まあ、やつちまつた物はしようがねえ。

もし追い出されてたら、教えてもらった夫婦の関係者を漁っていいう。

「や………」

内木信成がやつと口を開いた。

「やっ？」

「や」つてなんだ？

やかましい、か？やめろ、か？

「ですがとうとう見つけました！」

「はあ……それは良かったですね」

「ええ！雷久保さん！あなたですよ！いやあ、あなたとお会いできて本当に良かった！」

待て。お前お目は節穴か。今まで何を見てきたんだ。

おい。だから手を握るな。あと顔が近い。

「貴方はとても優秀だ。先日示してくれたように他人の気を引く交渉術。人の欲を感じ、時代の先を読む先見の明。官僚という地位。加えて妹が言っていましたか……」

そりゃあ、協力を是が非でも取り付けるために血眼になってたからな。あんたにはそう見えるよう演技したよ。

官僚の地位は産屋敷パワーだ。

ちらりと内木が妹を見る。

「咄嗟に動く判断力と行動力。身持ちの堅さ。そしてなにより、大きな利益を前にしても貫ける誠意と優しさ！」

喫茶店でのことを言ってるのか？

身持ちの堅さってなんだよ。

誠意と優しさ？さっきの贈り物を断ったのは打算と怠惰が理由だ。

あと唾を飛ばすな。

「素晴らしい！こんな逸材は滅多にいません！ぜひ妹の婿として当家に来ていただけないだろうか？」

来ていただけねえよ。

馬鹿か。

そんな婿探しより、ずっと気になっていた点が一つある。

こいつは俺を試したと言った。しかしそれはいつからだ？

俺たちのやり取りはどこからが茶番だった？

妹とこの邸宅に来た時か。

喫茶店で妹を助けたときか。

交渉が終わってからか。

内木と初めて会ったときか？

それとも面会の申し入れを行ったときか。

下手をすれば協力の約束でさえも媚探しとやらのための演目であつたかもしれない。

その如何によつて、俺はキレル。
当たり前だろう。

一体こいつに協力を取り付けるまでにどれだけの時間と労力をかけたと思つてやがる。

現在の世界の情勢と日本の立ち位置を調査し、内木の取り仕切る企業、投資する事業を視察。金持ちどもの勘に触らぬよう細心の注意を払つて行方不明の夫婦の情報を集め、産屋敷大先生に頭を下げて、官僚の身分を用意してもらつた。

したくもない移動。渡したくない情報量。すり減らした神経。作りたくもない借り（これが一番でかい）。

ここまでのものを払つて、最初から媚探しのための演技でえす、などと言おうものならその首ねじ切つて捨ててんげり。

俺は吊り上がりそうになる眉を無理矢理抑えて、笑顔を作つた。

「……内木様。ということとは、私との交渉を含めて今までおつしやられていたことはすべて演技、ということですか？」

俺の発言に内木は大仰に首を振つた。

「ああ！それは違います！あれはビジネスマンとして私が下した判断であり、今まで話したこともすべて本当のこと、それとこれとは話が別です。試したと言つたのは雷久保さんが妹とここにいらつしやつてからの質問ですよ」

心の中で安堵のため息をついた。

そりやよかつた。

割とマジで。

これで全部白紙に戻つたら、俺はこの任務をやめていたまである。
よし。

取り敢えずは大丈夫だ。

「それで雷久保さん？この申し入れ、受け入れていただけますか？」
だとすればこの妹の媚がどうこうについてどう断るかが問題になつてくる。

どうにも内木兄は妹を溺愛している節がある。

先ほど話した境遇がすべて本当のことならば仕方ない面もあるが。しかし無下に断って今後の協力体制にひびが入るのは避けたい。

……一番それっぽいのはやはり妹をダシにする方法だな。

内木はいつも縁談を斡旋してる。

おそろくだが今回のこれも、内務省警保局のコネを欲してだろう。グダグダと理由をほざいていても、どうせ官僚の地位に興味があるだけに違いない。

さすが成金。度し難い。

だが今回に限ってはその度し難さが俺の救いだ。

兄がコネを求めているだけならば、妹はこの縁談に同意しているのは表面的にだけであろうことは想像に難くない。

お前が誠意と優しさを俺に見出すのなら、誠意と優しさをもってお前を拒否しよう。

「申し訳ありません。内木様」

俺は頭を下げた。

「なぜですか？雷久保さん。私の妹は貴方のお眼鏡にはかかないませんか？」

「とんでもない。本音を言えば今すぐに受け入れたいくらいです。ですがこれは妹御様の意志ではないでしょう？」

不満そうな顔をする内木にはつきりと拒否を告げる。

「先ほども申し上げました。あなた方にはハッピーエンドがお似合いです。であるのなら妹御様にはご自分が選んだ素晴らしい殿方と共に歩んでいただきたいのです」

自分の口が勝手に動くのを感じる。

素晴らしい言い訳だ。

誰も傷つけず、誰も不幸にならない。

息をするようにこんな口実が出てくる俺はやはりすごい。

「ですから、大変残念ですがこのお話はなかったことに……」
勝った。

完全勝利。

俺はこの難局を切り抜けた。

内心、俺は既に勝利の余韻に浸っていた。

おそらくこれがいけなかった。

古今東西、勝利目前で油断をした將軍は必ず栄光を手にするこ
なく散るものだ。

「……………では妹の意志であればよいと？」

「はい？」

おそらくこの時の俺の表情は、生きてきた中で1、2を争う間抜け
面だったに違いない。

「良かった！なら問題ありません！何せあなたを婚約者にしたいと連
れてきたのは千代ですので！」

は？

俺は呆気にとられて隣の妹を凝視した。

内木千代は無表情にこちらを見ている。

「言いだしたのが妹？」

「理??解?????付かない。
な?ん?で?だ?」

政略結婚ならまだしも女の方から婚約を申し込まれる理由がない。

嘘か？

俺に同意させるための方便？

あまりにも凝視していたから内木千代が目を伏せた。

そしてその頬はわずかにだが、赤く染まっていた。

……………嘘だろ。

「雷久保さん。早速ですが婚約の準備をはじめましょう。ほら、千代」
意味の分からなすぎる展開に固まっていると内木兄はあまりにも
早すぎる発言をした。

「……………不束者ですが、宜しくお願い致します。」

そして妹もだった。

待て。
頼むから待って。

あいつマジ許さんからな（序）

むむむむ。

俺はベッドの上で上体を起こして、机の上の奴を睨む。

この薬湯め。

こいつはどうやったら減るんだ。

飲みたくない。

なんとか飲んだふりはできないだろうか。

茶飲みに入った緑色の液体とにらみ合いをしていたら、病室の扉が

コンコンと叩かれた。

そちらに視線を向ける。

「あ、アオイちゃん」

そこには蝶屋敷に来るたびいつも看病してくれる女の子が立っていた。

今日も髪を左右の二カ所に蝶の髪飾りでまとめている。

かわいい。

「善逸さん、お加減はどうですか？」

「もう大分いいよ」

今回の任務で少し負傷してしまった。

鬼に襲われていたおばあちゃんを庇って足を少し切られた。

痛かった。

でも今思えば庇わなくて良かったな。

だってその痛みで気を失って、目から覚めたら鬼が死んでたんだもんな。

あのおばあちゃんがやったんだろうけど、すごいなあ。

あの年であそこまで動けるなんて、何者なんだろう。

そういえば任務が終わった時は死ぬかと思ったけど、死ななかったな。

アオイちゃんば机の上の湯飲みに残っていることに気付いた。

そして俺をじつと見てきた。

「薬、ちゃんと飲んでますか?」

「の、飲んでるよ……」

視線が泳いでいるのを感じる。

まずい目をつむれ。

俺は飲んでいる俺は飲んでいる俺は飲んでいる俺は飲んでいる。

暗示だ。

俺は飲んでいる。湯飲みの中はお茶だ。

恐る恐る目を開く。

アオイちゃんは眉間にしわを寄せていた。

ああ、やっぱり駄目だったよ。

彼女はキツと目じりを上げて、俺を指さした。

「飲んでください!」

「いやっ!だってこれ滅茶苦茶まずいんだよ!人が飲むものじゃないでしょ!?!」

「薬なんですから我慢してください!飲まないと治るものも治りませんよ!」

「こんなの飲んだら死んじゃうよ!」

「死にません!」

「無理!」

「無理じゃありません!」

「無理!」

何度かの言い合いの末、アオイちゃんは大きなため息をついた。

「はあ。分かりました。じゃあ、甘味を入れて少し甘くします」

「おろ?」

あれ?

おかしい。

いつもだったらここまでに何も無く、怒鳴られて泣く泣く飲む羽目になるんだけど……

「甘くなったらちゃんと飲めますね?」

今日のアオイちゃんは何だか優しい音がする。

何かいいことでもあったのだろうか？

「飲めますね？」

「あ、はい」

険しい表情で言われて反射的に声が出てしまう。

甘さによります。

苦みの方が強いようならちよつと無理です。

戸棚から薬を取り出すアオイちゃんの顔はやはりほころんでいる。
気になる。

「は!!!」

まさか……アオイちゃんに、彼氏ができた!?

ありうる。

女の子は男ができるとすっごい変わるっていうし。

とても地味だった子が、彼氏ができたとたんに垢抜けるなんてざらにあるらしい。

アオイちゃん、いつもはずつと眉間にしわよせてるのに今日は少し笑ってるし。

いや、早まるな我妻善逸。

不確定な情報に身を躍らされるな。

まずは聞いてみるんだ。

「アオイちゃん。何かいいことでもあった？」

「え!!? な、なんでですか？」

ぐはあ!

ああ、反応があからさまだ。

いや、まだまだ!

「いや、今日ちよつと表情が柔らかいし、なんか機嫌がよさそうに見えるから……」

「そ、そうですか？」

アオイちゃんは顔を赤らめながら両手でほつぺたを触っている。
かわいい。

「顔に出てるのかな……?」
出ます。

「もしよかったら聞かせてもらってもいい?」

アオイちゃんはハツとして顔を引き締めた。

「いえ、久しぶりに文通していた方から手紙が届いたので、そのせいかもしれません」

「それは、アオイちゃんの友達?」

「友達……ではないです。命の恩人と言うか……」

「女の子?」

「いえ。男の方ですけど……」

やっぱり——!!!

ほら見ろ! ほら見ろ!

最悪だ!

誰だ! 俺のアオイちゃんに手を出しやがった奴は!

許さねえ! 絶対に地獄の果てまで追い詰めて、お前の髪の毛全部刈り上げてやるからな……

「ねえー! いるよ……ここにも! 文通してもらいたい男が一人いるよ!」

「はあ」

「なにその呆れ顔! 待ってよ! 俺ならこまめに手紙送るよ! 久しぶりの文なんて言わせないよ!」

アオイちゃんが少し怒った。

「善逸さんはもう少し分別をつけて下さい。鼻の下を伸ばしていたら、いつまでたっても結婚できませんよ」

「ひどい……これが彼氏ができた女の余裕というやつなのか……」

アオイちゃんは頬を赤らめた。

茹でだこみたい。

「か、彼氏!?! そ、そういうのじゃありません!」

「うべっ!?!」

頬を平手打ちされて、壁まで吹っ飛んだ。そして壁に埋まった。きりもみ回転からの壁グサツア。

伊之助だけでなく俺もやる羽目になるとは。

アオイちゃんもやっぱり鬼殺隊なんだな。

任務に行つてなくても腰の入った力強いビンタだった。

「あ!!ごめんなさい!善逸さん!」

「ああ。いや、大丈夫」

女の子に触れているからビンタを受けても幸せいっぱい。

「善逸さんが変なこと言うから……」

「あははは……ごめんなさい」

でも怒鳴るだけでよかったと思うよ。

俺以外の相手には手を出しちやだめだからね。

ただその顔を赤らめる反応で俺の心は折れたよね。

「こ、恋人なんて、柱の方にそんなことを言ったら失礼です
ほら。」

ん、柱?

「手紙をくれたのは柱の人なの?」

「はい、そうですよ。だからそう言うことでは……」

俺は柱という単語を聞いた瞬間に、思いがけず彼女に詰め寄っていた。

「その人名前は?!」

「え?」

「どの呼吸の使い手?!」

「えっと…鳴柱の雷久保鳴海様、ですけど」

ナルさん!

「その人、俺にも紹介してくれない?!」

「え、えええ!!善逸さん、あの方、男の人ですよ……?」

「いや、そういうことじゃなくて!」

違うんだよ。

今回はそうじゃないんだよ。

「俺さ、修業時代にナルさんにすごいお世話になったんだ。だけど色々あつて会えなくなつてからナルさん音信不通で……」

「ナルさん……?」

「ああ、ごめん。鳴柱の雷久保鳴海さんのこと」

「善逸さん、雷久保様とお知り合いだったんですか!」

「うん。じつちゃん…育手のところにいたとき色々面倒見てもらった

んだ。連絡できなくなつてからはどうしてるのか分からなかつたんだけど、鬼殺隊に入ってから柱だつたって知って…」

「そうだったんですか…」

鬼殺隊に入つて、ナルさんのことを知ってる人がいるかもしれないと他の隊士に聞いてみたんだ。

そしたら、

「ああ、鳴柱様だろ？心折つてくることで有名な。」

と言われた。

びつくりした。

強い人だとは思つてた。それに妙な音を出す人だとも思った。

でもまさか柱だなんて。

「ただ、今の俺さ。一隊士でしかないから。俺なんか連絡とつていいのかわからなかつた…いや、これも言い訳だな」

「善逸さん？」

「多分、手紙を送つて無視されるのが怖かつたんだ」

俺の中で、ナルさんは優しい兄貴みたいな存在だった。

会えなくなつても連絡の一つぐらくれけると勝手に思つてた。

でもナルさんから手紙も何も来なかつた。

それが俺には、ナルさんがもうお前と話すことはないって言つてるように思えて…

もし手紙が送つて何も返つてこなかつたら、ナルさんが俺を無視してるのが変えられない事実になつちやう気がした。

「でもアオイちゃんからはとても明るい、優しい音がする。ナルさんはやっぱり今でもナルさんなんだ」

思いやりの溢れた人からもらう手紙でもないとこんな音は出せないだろう。

それに鬼殺隊である俺たちはいつ死んでもおかしくない、そんな立場にいる。

「だから手紙を送つて、できれば会つて話もしたい…」

「善逸さん…」

「……………んだけど一人だと怖いから、アオイちゃんからナルさんに

言ってくれない!!」

「善逸さん……」

「なんだよおお! その顔! いいじゃん! 少しくらい手伝ってくれたっ
ていいでしょ?! 分かってたって一人だと怖いんだよおおおう!」

「もう。分かりました。いいですよ。ちよつと待っててください」

呆れた表情だがアオイちゃんは了承してくれた。

彼女は湯飲みを持って病室を出ていき、すぐに手紙一式を持って
帰ってきた。

「じゃあ、ほら、雷久保様にお手紙を書いてください」

「え?! いま?! 早くない?!」

「こういうのは思い立ったが吉日です」

「でも、やつぱり、今じゃなくても……」

「大丈夫ですよ」

「いきなり送られても困るかもしれないし」

「だから大丈夫ですって」

「忙しい時とかに限って連絡が多かったりするのちよつとムカつくよ
ね……」

「もうっ! 大丈夫って言ってるじゃないですか!」

彼女が怒った表情で怒鳴った。

「そんなの分からないじゃん?! ナルさんだってやつぱり変わってるかも
しれないし!」

「雷久保様はお知り合いを邪険にするような方じゃありませんっ!」

「アオイちゃんは最後にあったのいつよ?! 最近会ったことあるの?!」

「それは………ない、ですけど」

いきなり表情が落ち込んだ。

あ、なんか地雷踏み抜いたっぽい。

「確かにお会いしたのは、私が………最後に任務に出たときですけど」
あっ、やつぱり踏み抜いてましたねこれ。

いやあああああ!

アオイちゃんの最後の任務ってあれでしょ!?

アオイちゃんがトラウマになって、鬼と戦えなくなる原因になった

あれでしょ!?

ふっぎけんなよ!何そんなこと聞いてんだよ!

誰だよ!

アオイちゃん、滅茶苦茶悲しそうな顔してるじゃねえか!

誰だ!彼女の過去を穿り出すような発言をした奴は!!

俺だよ!ぶん殴るぞ!

「あのお、えーつと……」

「でも雷久保様は私の背中を押してくれて、私に道を示してくれました」

俺が焦って下手なことを言うまえに、彼女は顔を上げた。

「だからいいんです。私が道を逸れない限り、あの方が私にしてくれたことは正しかったと、そう言いきれぬから」

「……………ナルさんはアオイちゃんから見てどんな人だった?」

「……………優しく強い人でした」

そっか。

やっぱりそうか。

「でも初対面で鬼殺隊をやめろって言われたときはとても驚きました」

「…………」

そうか。やっぱりそうか……………。

変わってないな、あの人。

俺の時も鬼殺隊なんかやめとけって何度も言ってたからなあ。

「どんな感じで会ったの?初対面の時」

「初対面ですか?」

彼女はベッドの横に置いてあった丸椅子に座り、目を閉じた。

「最初にお会いしたのはあの任務が始まる前で…………」

「お前、才能ないぜ。良かったな」

雷久保様とお会いしたときに第一声でそう言われました。

流石にあの時はカチンとききましたね。

あの時の私は最終選別を終えてから順調に任務をこなしてきて少しずつ自信をつけてきた頃でしたから。

それなのに私のほかにも隊士が5人、周りにいる中で言われました。

はい？

初っ端でそう言い放たれたの？ですか？

そうですね。そのときはまだ雷久保様とお話したことはなかったです。

柱との任務を任されることになって、とても嬉しくて、事前の情報交換のときに御挨拶をしたんです。

そしたら返答がそれでした。

それから、

「まだ若いんだからよ、こんなクソみたいな仕事辞めてもつとまっとうに生きろよ」

と言われました。

私は家族を鬼に殺されてからずっと真面目に修練に取り組んでいました。

あの時の悲しみと怒りを胸に抱き続けて、自己研鑽に取り組み続けていたんです。

それを柱だか何だか知りませんが私の過去も努力も何も知らない男に、なんで貶されなければならぬのかと憤慨しました。

今思えば的確な一言でしたけどね。

「いくら柱であっても、初対面でそう言うことを言うって失礼じゃないですか？それに柱なのに鬼殺隊を貶すなんて何を考えているんですか？」

そのとき私はそう言い返しました。

雷久保様は私の反論を鼻で笑いました。

「俺の品性が疑われるだけであんたが鬼殺隊を辞めるなら安いもんだ

ろ」

完全に挑発されてるって思いましたね。

これも今思えば私を慮っての言葉だったんだと思います。

でもその時は頭に血が上ってしまつて怒鳴り返しました。

「なんですつて?!」

「それに、クソなものにクソと言つて何が悪い。鬼殺隊なんてな、社会に適合できないような人間の溜まり場なんだよ」

「鬼殺隊は鬼から人を守る高潔な組織です！私みたいに家族を鬼に殺されることのないように皆が必死に努力しているんです！それクソだなんて、あなた……最低です！」

鬼殺隊最強の称号をもらつている方に言う言葉じゃないです。

でも私には許せませんでした。

悲劇をなくすために戦っている人達をなんでそこまでき下ろすのか理解できなかった。

隊服に黒い羽織を着た雷久保様は腕を組んで淡々としゃべりました。

「じゃあ、聞くんが、鬼を殺していつたい誰が喜ぶ？」

「え？」

「米を作れば多くの人が腹を満たす。服を作れば人の体を守り、道具を作れば人の時間を節約し、芸術を作れば人の感性を豊かにする。じゃあ、鬼を殺すことは？」

「鬼を殺して他人の何を満たすんだ？食欲か？睡眠欲か？性欲か？知識欲か？」

「それは……………」

「人の何を省く？浪費か？時間か？労力か？」

「……………」

「鬼を殺して満たされるのは、己の復讐心だけだ。ちつぽけな自己満足なんだよ」

考えたこともなかった。

私の中で鬼を殺すことは悪を倒すことで、それそのものの意義を考えたことは一回もなかった。

彼は視線だけで鬼を射殺するような険しい目をしてた。

「だから言ったんだ。鬼殺隊はクソだと。化け物を殺す術しか持てないクズどもが飯の種を確保するために作ってる組織だ」

「そんな利己的な理解をしているのはあなただけです！自分本位な考えであんなに辛くて苦しい鍛錬を耐えきれはるはずがありません！」

「いいや、逆だね。自分のことだから真剣に考えられるんだよ」

この議論……というのは的確な表現ではありませんね。

この口論は平行線をたどりました。

結局、他の先輩隊士が仲裁するまで私は納得できず、雷久保様に食って掛かっていました。

まったく相手にされませんでしたけど。

これから鬼狩りに行くというのに部隊の士気は最悪もいいところでした。

皆さんもそれぞれに信念をもって鬼殺隊に入隊した身です。

それをあも貶されては良い気持ちはしないでしょう。

雷久保様の言葉に怒っていたのは私だけでなく、部隊の他の隊士5人もでした。

面と向かって雷久保様に食って掛かったのが私だけだったのは、ただ私は一番経験が若かったため、皆さんがフォローしてくださいっていただいたのでした。

実際、任務中には皆さん何度も雷久保様の悪口を言っていましたね。

え？どんな悪口か、ですか？

そうですね……確か、柱だからって調子にのってるとか、あれで弱かったらどうしようもねえな、みたいなことは言っていましたね。

それでも他の皆さんはある程度の経験を経てきた隊士でしたので、雷久保様が討伐予定の鬼の話をする頃には切り替えてました。

「今回の鬼は異形の鬼だ。偵察の報告では脂肪の塊に包まれた力士のような体をしているらしい」

「異形の鬼ですか」

「ああ。体長は10尺程度とかなりでかい。それに比べて頭は小さく

俺たちと同じくらい。加えて体の脂肪で首が覆われていて狙いづらい」

「相手は素手ですか？」

「鬼の得物は大きな鈍器。敵の体長と同じくらいの槌を両手で振り回す」

「……………聞く限りではどうにも鈍重な印象を受けますが、こんな人数が必要ですかね？」

この時は私を含めて隊士が6人、それと鳴柱の雷久保様の計7名で任務に向かっていました。

柱がいたので、過剰戦力じゃないかってみんなが思っていました。

「斥候の鳥の報告からわずかだが時間は経ってる。それに今回は人手の情報が極端に少ない。必ず何かある。油断すんじゃないよ。ど素人が」

「っ……………すみません」

そうなんです。

雷久保様、言い方がきついんです。

その時はなんとか穏便に済みましたが、言われた隊士の方は目じりがびくびくしていました。

険悪な雰囲気の中、私たちは目的地に着きました。

目撃報告があつたのは小さな村でした。

村人が50人ぐらいしかおらず、閉鎖的な空気が漂っていましたが予想に反して彼らは私たちをとても歓待してくれました。

「申し訳ありません。旅のものなんですけれども、水と食料が尽きてしまったのです。良ければお米と水売って頂けませんか？」

私たち隊士6人のまとめ役になっていた田口さんという方は村長にそう言いました。

私たちの図々しい申し出に村長は笑顔で答えました。

「おお。それは大変だ。お金は頂きません。少しですが村にある水と食料をお分けいたしますよう」

「ありがとうございます」

「それに皆さん大層お疲れの御様子です。どうでしょうか？今日は村

に泊まっていかれませんか？」

村長は初老の男性でしたがとてもお優しい方でした。

「よろしいのですか?！」

「もちろん。旅は道連れ世は情けと言います。人と人との助け合いが人を救うのですよ」

そう言っただけで私たちに宿を貸してくれたのです。

それだけではなく、ご飯までもごちそうになりました。

私たちはすっかり気分を良くして、ありがたくそこで寝泊まりさせてもらおうという話になりました。

でもその時に、外回りから帰ってきた雷久保様に反対されました。

あ、雷久保様は俺は目つきと口が悪いと仰って、村人との交渉事から席を外していたんです。

「この村に泊まるのは無しだ」

「え?なんでですか?」

「妙だ、この村は」

「妙?」

「ああ。周囲の様子を見てきたが畑が6割方荒れている。いくら小さい村といえど、あの状態でどうやって食っていつてるんだ?ここの村人は?」

「畑?」

「そんなの、村人が減って小さくなったとかじゃないんですか?」

「それだけじゃない。この村の人間、少しばかり親切すぎないか?田舎の農村だぞ?・排他的になるのが普通だろ?」

「それは貴方がひねくれているからそう受け取るんです。人の好意を素直に受け取ることもできないんですね、柱の方は」

「そういうレベルか?宿を貸して飯を出して、水と食料をただで渡す?なんでお尋ね者を接待してるんだよ。明らかに異常だ」

「人と人との助け合いが人を救う、そう村長さんも仰ってました。もう少し他人を信用してはいかがですか?」

「おいおい、箱入りか?おまえ。助け合いってのはな、自己の利益と他人の利益が被って、初めて生まれるんだよ」

言うことなすことを全部否定されて私は腹を立てました。

「だったらもういいです！あなたは一人で野宿でもされたらどうですか!？」

私たちはそう言うって雷久保様を追い出してしまいました。

今考えても酷い部下です。

雷久保様は「そうかよ」とだけ残してどこかに行ってしまった。

私たちは昼の間に村の方々からお話を聞きましたが、鬼に繋がりそうな情報は何もありませんでした。

慣れない情報収集で疲れ、這う這うの体で借りた宿に帰ってくる、その晩も豪華な食事を出していただけました。

「いいんですか？こんなに？」

「いいですよ。祭り以外で出すこともない食材ですから」

「普段を召し上がらないのですか？」

「そういう決まりなのです」

お酒や猪のお肉、鶏卵などとても貴重なものを頂きました。

昼間は何の成果も得られなかったので村長にも鬼の情報も聞いてみたのですが……

「そういえばこの辺りで行方が分からなくなる方が多いと聞きました。この辺りでは何かあるんですか？」

「……………なにか、ですか…夜には熊が出たりしますから、この辺りの地理に疎いものが運悪く遭遇してしまったのかもしれないな」

「他には何か聞いたたりしませんでしたか？例えば、そう……………鬼、を見たとか」

「……………」

村長は少し沈黙をした後、大笑いしました。

「はっはっは！さすが旅のお方！冗談にもキレがありますな」

「…………それは、なによりです」

「何もいませんよ。大方、山道を逸れて森に迷い込んでしまったのでしょう。夜の森は深い。安易に山に入り込めば出られなくなりますからな。都会の人間は森を舐めているのですよ」

と、あまり有用な情報も得られずその晩は終わりました。村のほぼ全員の人に聞いてもそれらしき情報は得られず、妙な噂も聞かない。

情報集める段階でここまで綺麗に躓いたのは、6人全員が初めてで参っていました。

そのせいで就寝前にはみんなで鳴柱の悪口を言い合ったりもしましたね。

え？ど、どんな、ですか……

あまり言いたくないのですが、その、彼女絶対いないとか、一生独身とか、珈琲に砂糖大量に入れてそうとか、完全に個人的な悪口になってました……

と、とにかく！

それでその晩は寝たのですが、問題はそこからでした。

「フウフウフウフウ」

その晩、寝ているときに妙な息遣いが聞こえてきたのです。

そして水音も聞こえました。

ぺちやりぺちやり、と粘性の液体が落ちるような音です。

妙な音に私は目を覚ましました。

視界に入ってきた天井は見覚えがなく、妙に高いことが分かりました。

不審に思いながら視線を下し、そして目に入ってきた光景に愕然としました。

そこには鬼がいたんです。

あいつマジ許さんからな（破）

そこには鬼がいました。

10尺を超える体長につきすぎている脂肪、体のわりに小さい頭、腰の下げている大きな槌、任務のまえに知らされた鬼の特徴と一致していました。

その鬼が隣で何か音を出しているのです。

私は咄嗟に寝具の横に置いてあった日輪刀を取ろうとして、更に驚きました。

体がまったく動かなかったのです。指先がピクリともしませんでした。

辛うじて動かさせた目だけ横を見ると、その鬼は田口さんのお腹を指でかき回していました。

皮膚を貫通させ、とても太い人差し指の第二関節までを体の中で伸縮させていたんです。

田口さんは痛みと恐怖で震えていて涙が流していました。

指が動いたたびに、動かない筋肉に代わって涙が流れていました。

それにも関わらず鬼は彼を食べようともせず、太い人差し指でお腹のなかをなでていました。

「では、今回もお約束通りに」

そこで声がしたのです。

目を凝らすと鬼の向こうには村長が手をすり合わせて笑っていました。

「遊び終わったらこいつらの服、金、刀は全部やるからねえ」

鬼が低い声で返答しました。

「俺の遊びを邪魔しちやいけないなえ」

それだけ言ってまた田口さんのお腹を掻き増し始めました。

私はそこでようやく自分たちが騙されたことに気付きました。

この村は鬼と協力関係にあったのです。

村は旅人を歓待し、宿を貸し、油断したところで薬を盛る。

そして動けなくなつた旅人を鬼に渡して食べさせる。

鬼は人間を食べて、村人たちは旅人の荷や服を剥ぎ取る。

そうやって生きていたのです。

親切だったのは、私たちを油断させて鬼に渡すため。

畑が荒れていたのは、この村は農業で生計を立てていないからでした。

旅人の身に着けてるものを売り払って得たお金で、彼らは生活していたのです。

鬼に食べられる直前になって馬鹿な私は気づきました。

村長は目を覚ました私に気付き、私の方に近寄りってきました。

そして膝をつき、私の耳元でこう言ったのです。

「ここは村の離れにある鬼神様の社です」

「っ……」

「今からあなた達は鬼神様の供物となるのです」

「!?」

「いやあ、助かりました。最近は旅人が減ってしまつてね。生贄をどうするか悩んでいたのですよ。そしたらあなた達が来てくれた」

「……あ」

「本当に、人と人との助け合いが人を救いますね」

村長はにやりと笑つて私から離れました。

そして部屋を出ていった。

私は自分を罵倒しました。

なんで不自然な点に疑問を持たなかつたのか。

なぜ会つたばかりの人たちを信用したのか。

なぜ雷久保様の忠告を素直に聞き入れなかつたのか。

時すでに遅し、でした。

田口さんを弄っていた鬼が、私が起きたことに気付いたのです。

鬼は指を止めて、私の方にその顔を向けました。

「男だけじゃつまらないからねえ。苦悶の顔はねえ、女の方がみる甲斐があるよねえ」

鬼は腰を上げて、次は私のお腹の上に腰を下ろしました。

「っ!!」

声は出ませんでした。

ただ殴られたような衝撃に胃の中のものごと口から出てきました。

「おお、おお、綺麗だねえ。いまからもっと綺麗にしてやるからねえ」

「…いお……」

鬼が指で私の胸をなぞると光が発し、私の隊服が縦に裂けました。

——血鬼術!?

鬼はどうやら電気を操る血鬼術が使えるようでした。

その電気の熱で隊服の裂けた胸部が焼けて、激痛が駆け巡りました。

「っ!!」

無音の悲鳴を上げて、涙が大量に出てきました。

そんな私の姿を見て、鬼は涎を垂らして笑っていました。

見開いた鬼の左目には「下参」の文字が刻まれていた。

下弦………十二鬼月!!

「綺麗だねえ」

既に私の闘志は消え失せていました。

筋肉が麻痺しているせいで呼吸ができず回復も望めない。

激痛が思考を麻痺させて、恐怖だけが大きくなっていく。

いやだ。怖い。

死にたくない。

誰か。誰か、助けて。助けて……

「……………あうええ」

——雷の呼吸 壱ノ型 霹靂一閃

動かぬ口で助けを求めた直後、風が吹き荒れたんです。

そして気づくと鬼の首が切れていました。

あまりの速さに首の部分だけが吹き飛び、頭が鬼の体の上にポテツと落ちていました。

「おい。神崎。生きてるか?」

私の目の前には納刀を済ませた雷久保様がいました。

「……あい」

ほとんど動かせない口で私はなんとか答えました。

「そうか」

雷久保様はひとこと仰つて、次に田口さんに駆け寄りました。

「田口、生きてるな？落ち着け。今、止血する」

雷久保様は田口さんのお腹の傷を見てすぐに腰の下げ袋から何かを取り出していました。

その姿を見て、何故か涙がいつぱい出てきたんです。

安堵で涙が止まらなかった。

でもそんな私の目の前で、首を切られたはずの鬼の体が動いたんです。

体が崩れ始めていませんでした。

それどころか腰にかけていた槌を両手に持ち、大きく振りかぶりつたのです。

振り下ろす先には雷久保様と田口さんがいました。

——雷久保さん！

「っ！」

伝えようとするが、声に出なかった。

ズドンツ!!!

槌が大きな音を出して、床をえぐりました。

「おいおい、てめえ。怪我人の手当てしてるのが見えねえのか？ぶつ殺すぞ」

鬼の背後から声が聞こえた。

無事だった。

良かった。

雷久保様は抱えた田口さんを床に寝かせて、訝しげに鬼を見ました。

「首切ったよな？なんで生きてんだ？お前」

「俺の脂肪は生きてるからねえ。脂肪に包まれた首を切ってもねえ、脂肪がっつけてくれるんだよねえ」

鬼は繋がった首を回しながらそう言いました。

この鬼は首が脂肪に埋もれているせいで、首を切っても切り口が固定されてしまうんです。

その上、下弦の鬼なので回復力が通常の鬼とは比べものにならない。

この鬼は首を切られても、周囲の脂肪が切り口に移って鬼の首を再生してしまうというとても厄介な特徴を持っていました。

「それよりもねえ。お前はねえ。俺の遊びを邪魔したんだよねえ」

「あ？だつたらどうする？このデブが」

「今からねえ、お前をねえ……………」

鬼が何かを言おうとしたとき、

「な、なにをやっている!?!」

村長が部屋に戻ってきていました。

おそらくいつもとは違う物音を不審に思ったのでしよう。

そして彼は雷久保様を睨みつけた。

「貴様……………昼間、村を嗅ぎまわっていた奴だな？鬼神様の邪魔をしに来たわけか！」

「だとしたら?」

「そうはしません！」

村長は手に持った鉈を私の首にあてました。

「動くな！動けばこの女の首を切る！」

「……………」

「鬼神様はわが村の守り神なのだ！怒りを買ってはならん！よそ者は大人しく食われていればいいのだ！」

そう村長が叫んだ直後でした。

「うるさいねえ」

「っ!?!」

私と村長の真上には鬼の槌が振り上げられていました。

——いつの間!?」

そこで嫌な金属音が鳴ったのです。

「うおっ!?!」

反射的に目を開けた先にいたのは雷久保様でした。

雷久保様が私たちの体長の二回りはあろうかという槌を、刀で受け止めていました。

衝撃がとても強かったのでしよう。

彼の手は大きく震えて、額には冷や汗が伝っていました。

「重っ、い、んだよ！このクソデブが！」

雷久保様は、背後を向かって叫びました。

「守り神が守る対象に手を出すか？ボケが！」

「ひいひいひい！！」

彼に守られていた村長は頭を抑えて、腰を抜かしていました。

「失せろ！クソ爺！」

「た、助けてくれ！」

村長は涙と鼻水を垂らしながら部屋の外へ走っていききました。

その間にも雷久保様は段々と押されていき、体勢が後ろに傾いていききました。

刀と槌が競り合つて、震えた金属音が響く。

「しっこいねえ。邪魔だねえ」

「はっ！ほざいてろよ！肥満野郎！」

鬼の手元がパリパリとはじき出した。

あれは……血鬼術の！！

「あ、ぶあ……い」

先ほど見た光と同じだったので私は麻痺する口で何とか伝えようとしてきました。

「ああ！！」

「おに……じゅ……っ……」

伝えようとした瞬間。鬼の手元が光った。

そして電気が駆け抜けた。

雷久保様の体に光が踊り、落雷のような凄まじい音がした。

私は光のまぶしさに目をつむりました

そして後から肉の焼ける音がした。

焦げ臭い。

はっとして目を開く。

私の目の前で雷久保様はまだ立っていたました
振り下ろされた槌を未だに受け止めており、手元がカタカタと震えている。

だけど彼の全身は焼けていて、いたるところから出血と焦げがある。

彼のそんな姿を見て鬼は笑いながら言いました。

「お前は本当にしつこいねえ」

「あ？遊んでんのか？静電気かと思ったわ」

雷久保様は強がりと言っているが、表情は苦い。

次もう一度喰らえば、どうなるか分からない。

でも私をかばって、動けないんだ。

いけない。

このままじゃ全滅してしまう。

私たちが雷久保様の忠告を聞かなかつたばかりに、柱の方までもが死んでしまう。

「もう、いいです…」

いつの間にか口が動くようになっていた。

「あ？」

「もういいんです」

「だから何がだよ」

「私たちを庇わなくて、いいです。このままだと鳴柱のあなたまで…」

彼は刀を渾身の力で支えながら、視線をこちらに向けた。

「いつちよまえに、上司の心配か！そんなこと考えてる暇があるのならこの状況を一刻も早く切り抜ける手段を考えろ！」

「そんなこと、言っている場合じゃないですよ…私たちは鬼殺隊です。死ぬ覚悟は全員しているんです。だから…私たちを庇うより、その鬼を討って…」

「口を閉じろ、神崎」

雷久保様が両手で刀を支え、槌を押しとどめながら叫ぶ。

「お前の命を、誰よりもお前自身が秤にかけるんじゃないやねえ」

鬼の手元が光る。

また、来る。

「いいか、よく聞けよ、神崎。鬼殺隊の目的は鬼を殺すことじゃねえ。人を救うことだ。鬼狩りは手段であって目的じゃない。そこをはき違えるな」

「雷久保さん……………」

「俺は絶対にお前らを助ける。そのためにあの鬼を殺す」

空気がはぜる音。

あいつの血鬼術が……………」

「自分の芯さえぶれなきやあ、あとは粘りだ。まあ、見てろ」

雷久保様の目だけが一瞬こちらを向いた。

「シイイイイイイイ……………」

雷久保様の口から蒸気のような煙が漏れる。

すごい呼吸音だ。

私の耳にまではつきり聞こえる。

「次はねえ、殺すねえ」

そして鬼の手元から強い光がこぼれた。

来た！

「能無しが！ワンパターンなんだよ！」

——雷の呼吸 肆ノ型改 遠雷流し

槌が光った瞬間、雷久保様は刀を回転させて刃で受け止めていた槌を柄で受け止め、刃で床を刺した。

ちようどトンカチで釘を打つような形になった。

その瞬間、鬼から流れ出た電撃が大量の光と共に地面へと流れていく。

床が光り輝き、床板を割りながら電気が地面へと伝わった。

不思議な光景だった。

まるで避雷針が受け止めた雷をすべて地面へ逃がすように、刀が血鬼術の稲妻をすべて地へ流していた。

「てめえの雷撃がどれだけ強くても、要は雷と同じだ」

雷撃で光り輝く部屋の中で、雷久保様は笑っていた。

「まともに受け止めずに地面に流す。それだけでいい」

そして彼は刀を床に刺したまま下段に構えた。

構えられた刀には雷撃が迸っていた。

あまりの帯電に、刀の周りの空気が焼けている。

「こいつが欲しかった」

「!?!」

鬼が驚愕の表情を初めて浮かべる。

「ありったけの熱と雷は頂いた。そのままお返ししてやるよ!」

また雷久保様からあの呼吸音がする。

「シイイイイイイイイイ」

——雷の呼吸 伍ノ型

「熱界雷!」

雷久保様は脚を踏みしめる。

脚力が強すぎて、床にひびが入る。

彼はそのまま素早い切り上げを放った。

電撃と熱を纏った彼の斬撃は凄まじい音と光を放ち、鬼の首を焼き切った。

鬼の首がまたしても、体の上に転がる。

「意味ないねえ。俺の首はどうせつながら……」

だが鬼の体は鬼の予想に反してボロボロと崩れ始めた。

鬼が目を見開く。

「なんで俺が態々てめえの貧弱血鬼術を待つてやったか分かるか?」

彼は鬼の表情を鼻で笑った。

「首の周りの細胞もまともて焼いちまうためだよ、ドアホ。てめえの脂肪が生きてようが、首ごと焼き切っちゃまえば再生もできんだろ」

「おか、おかしい、おかしいねえ!」

鬼の首が叫んだ。

雷久保様は中指を立てる。

「遊びは地獄で付き合ってる。失せろ」

彼の言葉を聞いて鬼は目を見開き、そして笑った。

口が開きかけたところで、頭もボロボロと崩れていった。

あいつマジ許さんからな（急）

雷久保様は刀を払い、静かに納刀した。

そして鬼が崩れた場所をしばらく見ていた。

「……………」

そしてこちらに寄ってきた。

「神崎」

「はいっ」

「傷を見るぞ」

雷久保様は私の胸にできた火傷を見た。

雷久保様はそれを見て、下げ袋から取り出しかけていた入れ物をしまいました。

おそらく軟膏の入った薬箱だと思えます。

「深いな……………水を持ってくる。すこし待ってろ」

「あの田口さんは……………」

口と目だけ動いても彼の様子が分からなかったので心配になりました。

「応急処置は済んでる。あれ以上は医者に見せるしかない。俺がやって太い血管でも傷つけたら目も当てられん」

「ひどいんですか……………」

「今のところは無事だ。お前は自分のことを考えろ」
彼はそう言っただけで一度部屋から出ていこうとしました。

でも私は聞かずにはいられなかった。

心の中が罪悪感でいっぱい、傷の痛みよりもその痛みの方が激しかった。

「あの……………」

私が声をかけると彼は足を止めて振り返った。

「なんだ？」

「怒って、ないんですか？」

「何に對して？」

彼の目に怒りのような感情は感じられなかった。

「あなたの言葉を信じなかった私たちに、です。あなたの言う通りにして居ればこんなことにならずに済みました」

彼はしばらく黙っていたが、そのあと大きなため息を吐いた。

「怒ってるに決まってるだろ。アホか」

「うっ……」

「くだらないこと言っていないで寝とけ」

それだけ言うと雷久保様は部屋から出ていった。

あれだけ私たち鬼殺隊をこき下ろしていたのに、鬼を殺すことをあれだけ否定したのに、彼はすべてをこなした。

十二鬼月を倒し、私たち全員と村の人の命まで救ってしまった。

戦っていた彼の目には確かに芯があった。力があつた。

それなのになぜ彼はあんなに鬼殺隊を毛嫌いするのだろうか。

それから雷久保様が私たち全員の応急処置をし終えた後、隠の方が来て、体を動かせない私たちを運んでくれた。

その時に村の人達が私たちを見ていた。

彼らは鬼神様に捧げた私たちが生きていることに、戸惑いを隠せないようだった。

「お、おい。あんたら…なんで……」

「……」

「鬼神様は……」

「……」

隠の方々に背負われた隊士は全員、村の人を睨んでいた。

当たり前だ。彼らは私たちを騙して鬼に食わせようとしたのだから。

でも雷久保様は反応しなかった。

黙々とただ歩いていた。

その背中はまだ悲しそうだった。

「まさか、こうも長くなるとは思いませんでした……」

私は病室のベッドで横になりながら独り言ちた。

私はその任務から1週間、未だ上手く動くことができず、療養施設で回復に努めていました。

というのも私があゝの鬼に受けた雷の血鬼術、あれには長期間筋肉の動きを阻害する効果が合ったみたいなのです。

村の人たちに盛られた薬が神経に作用するものだったのも相まって、私は回復が遅れているいました。

時間が経てば治るそうですが、体の動きに違和感がすごい。

というかそれを受けても即座に動ける鳴柱さまは……人間？

蝶屋敷の天井を見ながら、大きなため息を吐いた。

蝶屋敷というのは、花柱さまの私邸です。

鬼殺隊の隊士は柱になると邸宅をお館様から承るのですが、花柱さまはその私邸を負傷した隊士の治療所として開放してくださっているのです。

天井に向けてぎこちなく手をかざす。

見間違ひなく、その手は痙攣していた。

これは毒と血鬼術の後遺症ではない。

ただの恐怖だ。

私はあの状況、そしてあの時に刻まれた傷を思い出すと体が震えだしてしまう。

武者震いだと自分に言い聞かせても意味はなく、余計に震えが強くなってしまう。

鬼殺隊として情けない。

分かっているのに体が言うことを聞いてくれない。

「情けない……」

腕がベッドの上に落ちた。

「神崎。起きてるか？入るぞ？」

病室の扉の奥から声がした。

雷久保様の声だ。

私は慌てて止めた。

「え?!ちよつと待つてください!」

急です!急に來ないでくださいよ!

私はベッドの横の机から手鏡を取り、髪を整える。

寝ぐせとかないよね?!目やにとか付いてない!?

「……………大丈夫か？」

「あ、はい!どうぞ!お入りください!」

雷久保様が部屋に入ってきた。

「おはよう。体の調子はどうか？」

雷久保様は隊服と真っ黒な羽織りを着て、左手には籠を抱えていた。

お見舞いに来てくれたんだ。

「これ、見舞いの品な。個人的には甘味にしたかったが、病人にはしつこいから柑橘系の……………神崎？」

「……………はい？」

「大丈夫か?まだ体調悪いのか？」

「いえ……………体はまだ上手く動かせませんが、日常生活に支障が出るほどじゃありません」

「……………顔が真っ赤だぞ。風邪か？」

「へ!?!」

私は後遺症なぞ何のそのという速度で手鏡を取った。

鏡に映った頬と耳はリングゴのような真っ赤に染まっていた。

な、なんで!?

さつき見たときは大丈夫だったのに!

「まあ、まだ一週間しか経ってないしな。あんまり優れないなら出直す……………」

「だ、大丈夫です!ばつちりです!」

「お、おう」

雷久保様が引き気味に頷いた。

そして籠を隣の机に置いた。

にしてもこの方、部屋に入って来た時から体の芯が全くぶれていない。

やっぱりこの人は柱なんだなあ。

彼が備え付けの丸椅子に座った。

雷久保様の顔を見るのが妙に気恥しい。

「えっと、あれから皆さんはどうですか？」

「田口以外の4人はもう復帰して任務に出てる。田口は傷が深かったからな、産屋敷大先生の伝手を頼った。信頼できる病院で手術して今は療養中だ。」

「田口さんは大丈夫だったんですか？」

「幸い、臓器に深い傷はついてなかった。もう意識も戻ってる。ただ出血がひどかったからまだフラフラだろうな。ただでさえ鉄不足で顔が青いのに、俺が見舞いに行ったらあいつ顔真っ青にしてて滅茶苦茶面白かったぞ」

「あははは……」

任務中に私たちが悪口を言っていたことなんてお見通しらしい。

私も若干気まずい。

でもこの方、それを楽しんでいる気がする。

「あの……すみませんでした」

「ん？」

「任務前にあんな失礼なことを言ってしまったって」

「ああ、あれか」

「雷久保様のおっしゃった通りでした。人の言うことを聞かず、騙されて、拳句の果てに雷久保様の足を引っ張って、庇って頂きました」

私は反射的にシーツを握り締めた。

「偉そうなことを言っておいて、結局みんなを助けたのは雷久保様で、私は泣き叫ぶことしかできなかった。私には才能なんてありませんでした」

「お前たちに十二鬼月は荷が重かった。そして強い奴が弱い奴を守

る、それだけだ」

雷久保様は慥然としていった。

「そうではないんです」

私は彼の前に手を出した。

「見てください」

手は無様なほどに震えていた。

「あの戦いを思い出す度、体が震えだすんです。止めようとするればするほどあの鬼の顔が鮮明に浮かび上がるんです」

「……」

「あなたの言う通りでした。私に才能なんてなかった。死を間近に感じただけで心が折れてしまいました。呼吸を使おうとするたびに全身が硬直して動けなくなるんです」

任務の前に言われた言葉。

『お前、才能ないぜ。良かったな』

あれは正しかった。

「私は、ただ皆さんの真似をしているだけでした。家族が鬼に殺されて、私はこんなにも鬼を憎んでいると、やられっぱなしじゃないと、そういうポーズをとって自分を慰めていただけ……私は何もできなかった……」

頭に何かが乗った感触がした。

見上げると乗っていたのは雷久保様の右手だった。

「死の恐怖を知らない人間に希望は見いだせない」

彼は私の頭をなでて、優しく言った。

「絶望の中でしか希望の光は輝かないからな」

希望の……光……

「生の危うさに怯えるお前にしか、できないことが必ずある」

「っ……………」

目じりが熱くなる。

感情を乱してはいけない。

「怒って、ください。なんで優しくするんですか……」

彼は無言で私の頭を軽く撫でる。

「全部、私が悪いのに……」

「必要だから涙は出るんだよ。泣け泣け。あとで思う存分馬鹿にしてやるから」

「っ……………」

零れてしまう。

大粒の涙が何度も。

§

「しかしまあよく泣いたなあ、お前」

「いい、言わないでくださいよ」

雷久保様が苦笑する。

チリ紙で鼻をかむ。

目が腫れている。ちよつとかゆい。

目を手で書いていたら女性の声が廊下から響いてきました。

「雷久保さん！あなた何してるんですか！」

雷久保様はそこにいた女性を見て、苦い表情を浮かべていました。

「げ、胡蝶妹……………」

「その子を泣かせたんですか!?!」

隊服を着た短髪の女性の方が廊下からこちらに駆け寄ってきました。

そして雷久保様の手を払い、私を胸に抱いてくれました。

この人、蝶の髪飾りをしている。

それに顔が花柱さまにとても似ている。

それに雷久保様がいま、胡蝶妹って言っていた。

もしかして花柱さまの妹さんでしょうか？

「いや、これは……………」

胡蝶さんは私を抱きながら、雷久保様をキツとにらんだ。

「いつも言っていますがあなたは言葉がすぎます！なんでそう乱暴な言葉遣いしかできないんですか！」

「おい、ちよつと待て」

「少しは相手を思いやることを学んではいかがですか?!柱だからって周りと協調しなくていい理由にはならないんですからね！」

「お前は俺を思いやれよ」

「大体あなたはっ……………」

「しのぶ」

いつの間にか怒っている胡蝶さんの後ろに人がいた。

気づかなかった。

いつ入ってきたのだろう。

「ダメよ。そんなこと言っちゃ」

「姉さん……………」

花柱さまの胡蝶カナエ様だ。

綺麗な黒い長髪に、とても美しい容姿。

優しい表情。不思議な香り。

この人がいると不思議と場が和む。

妹さん、しのぶ様っていうんだ。

しのぶ様は不満そうに口を開いた。

「でも、この人っ」

「この人、じゃないでしょう」

「だって……………」

「だってじゃないわ。彼は柱よ。礼節を欠いていい理由はありません」

花柱さまはにこやかに笑っているが目は笑っていない。

雰囲気为重くなる。

それに耐えられなかったのか、しのぶ様は渋々頭を下げた。

「…………ごめんなさい」

「謝るのは私にじゃないわよ」

花柱さま、厳しい…

しのぶ様は花柱さまの目を見るが、彼女はにこやかに笑いながら首を横に振った。

彼女はさび付いた機械のようにぎこちなく雷久保様の方へ向き直り、ぎこちなく頭を下げた。

「……………すみませんでした。雷久保さん」

「……………ああ、気にしてない」

雷久保様はバツが悪そうに頭を掻いた。

「良くてきました」

花柱さまは嬉しそうにしのぶ様の頭を撫でた。

しのぶ様は恥ずかしそうに俯いた。

それを見て、花柱さまは嬉しそうに微笑んでいた。

頭をガシガシ書きながら雷久保様が花柱さまを見た。

「相変わらずかかってえなあ、カナエは」

「鳴海君は黙ってて！私はこのぶを立派な大人に育てる義務があるんだから」

「はいはい」

あれ？

二人のやり取りはとても親密に見えた。

なぜか少し胸がもやつとする。

鳴柱さまと花柱さま。

やはり柱同士になると普段から交流も多いんだろうか？

「ああ、そうだ。カナエ。一つ頼みがあるんだ」

「あら、珍しい。なに？」

「その神崎なんだが、蝶屋敷で働かせてやってくれないか？」

「……で？」

柱のお二人が友人のような空気で何かお話している。

そんなお二人をしり目に私は視線を上に向けた。

「あの……………」

「ん？どうしたの？」

花柱さまの妹と思われるしのぶ様に聞いてみる。

「あの二人は仲がよろしいのですか？それとも柱同士は皆さんあ
いった感じで打ち解けているんでしょうか？」

「ああ。あれね」

しのぶ様は雷久保様を睨みながら言った。

「認めたくないし、気に食わないんだけど……鳴柱の雷久保鳴海と
花柱の姉さんはまあ……」

彼女の言い方に何か嫌な予感がした。

「世間一般で言う、恋人同士ってことになるのよ」

「う、う、う……」

§

「こいびとおおおおおおおおおお!!」

「あ、あの？善逸さん？」

善逸さんは顔を真っ赤にして叫びだした。

とても暴れている。まだ話の途中だったのに……

「あいつ、ふっざっけんなよ！なんだ、あの野郎!! 恋人なんていやがっ
たのか!!」

「ええ。まあ、そうですけど……」

「くそがああ！騙しやがったぬああ！なにが 〃恋人なんかいた方が辛
いぞ〃だよ!!」

「っ……」

善逸さんは叫んだままシーツを振り回す。

「許さねえ！あんな笑顔のくせして陰で俺に恋人ができないことを
笑つていやがったな！」

「ちよ、落ち着いて」

暴れすぎてベッドから落ちた。

ものすごい音がしたんですが……

恐る恐るベッドの向こう側をのぞくと、善逸さんがむくりと起き上

がった。

勢いよく振り返り、修羅の目つきで私に視線を向けた。

「アオイちゃん。ちよつとあの馬鹿のいるところ教えてくれない？一発ぶん殴りに行ってくるから」

「さつきまで一人で行くの怖いとか言ってたじゃないですか!？」

「もうそんなことどうでもいい。あいつを殴らないと俺の気が済まない」

「だからちよつ、待って……………」

善逸さんはとうとう枕を振り回し始めた。

一体、善逸さんの何がここまで彼を突き動かすのだろうか？

普通に怖い。

「許さん！謝れ！あんたのことを考えて連絡を遠慮していた俺に謝れ！」

「あなたはまだ安静にしてなきや、というかこんなに暴れたらしめな様が……………」

「そして俺にも女の子を紹介しろ！」

「そつちが本音でしょう!？」